

【特集】

長野 自然との共生を支える人々

座談会
メッセージ

建設コンサルタントで働く！
長野への想い 伊東豊雄

Glocal KANTO

グローバル関東

Vol. 7
January
2014

CONTENTS

- | | | |
|----|---------------|--|
| 02 | MESSAGE | インタビュー
長野への想い |
| 04 | 特集1 | 長野県のダムの魅力 |
| 08 | 特集2 | 国営アルプスあづみの公園における
建設コンサルタントの運営管理業務について |
| 12 | 特集3 | 千曲川をワインバレーに！
原産地呼称管理制度から地域の活性化へ |
| 16 | 特集4 | 東日本大震災の翌日に被災した栄村の記録
～長野県北部地震からの復旧・復興～ |
| 20 | 座談会 | 建設コンサルタントで働く！ |
| 26 | 坂東の原風景 | |
| 28 | ニュースの裏側 | |
| 30 | 技術人に聞く | |
| 32 | 土木ツアーNavi連動企画 | |



自然との共生を支える人々

特集

Special Features

長野

1都3県に匹敵する面積を有する長野県。日本の屋根と呼ばれ、県境には高山が連なる急峻な地形でもある。
そんな長野県の豊かな自然と、それを背景に活躍している一次産業や建設業界の頑張りや新たな取り組みを紹介したい。
知られざる奥深い世界にスポットライトを当て、日本の原風景「長野」が持つ魅力と、日本の屋根を支えている人々の古くて新しい活躍に迫る。

インタビュー 長野への想い

建築家 伊東 豊雄

■幼少の頃の長野での思い出

二歳半でソウルから父親の田舎下諏訪に引き揚げ、最初は父親の親戚の家の間借りで、昔の農家のような広い縁側と玄関に土間と蔵が二つある大きな家でした。周りが田んぼや畑で、裸足で毎日遊びました。まもなく、自分の家を父親が建て、すぐ近くの諏訪湖や山で遊びました。

小学四～五年生で、諏訪市上諏訪の諏訪湖畔に移り、そこで父親が味噌の醸造業を始め、温泉の権利を一本買って、麴を発酵させていました。米が発酵したのもみは、真っ白で、ふわっと本当にきれいでした。家の庭先がすぐ諏訪湖で、夏はトンボを採り、冬は諏訪湖で下駄スケートをし、学校にも下駄スケートで行ったり、本当に田舎の子の生活でした。

■諏訪の自然

諏訪は盆地で、真ん中に湖があり、その周辺に皆が住み、後ろがどこも山で、諏訪湖に向いて暮らしていました。明日の天気も、諏訪湖の波の方向で、予測していました。

諏訪湖はほとんど波の立たない静かな湖で、水平虹が冬の朝に出ます。冬の初め、急速に気温が下がると、湖面との温度差で朝もやが出ます。朝陽が出た時、

湖面すれすれに虹がすーっと出て、これが水平の虹です。子供ながらにすごくミステリアスで、一冬に二度ぐらいしか出ませんが、とても印象的でした。

また、諏訪湖に氷が張ると、明け方、一番温度が下がった時に氷が膨張し、岸に氷が打ち上げられる時にゴーツという音が寝床まで響き、子供でも起きてしまう程でした。それぐらい冬は厳しい自然でした。

■当時の暮らしぶり

その頃の長野は農業が中心で、戦後の物のない時代でしたから、引き揚げ家族の僕達は、近くの農家からヤギの乳をもらって飲んだり、野菜も家の畑で、家で食べるキュウリ、トマト、ナスを素人ながらに庭で栽培していました。

当時は魚もほとんど諏訪湖に依存し、冬にはワカサギ、エビ、フナとか、雑魚が採れ、本当に地産地消の生活でした。ウナギも結構諏訪湖で採れました。

■信州人の気質

盆地のせいか、信州人は非常に我慢強く、厳しい気候の中で暮らし、普段は比較的無口で、理屈っぽく、教育熱心な県で、建物を建てるよりは教育だという地

域でした。先生になる人も多く、農家に生まれると、長男は農業を継いで、次男は信大に進み先生になるというのが優秀な子のパターンでした。

ですから、普段は非常に質素に地道に暮らし、七年に一度の「御柱祭」では、弾けたように、一気に普段の鬱憤を晴らすというか、我慢していたエネルギーが弾けるような、そういう凄まじさがありました。そのために生きているんじゃないかというぐらい、あの「御柱」を楽しみにし、遠くから親戚が集まり、御馳走でもてなします。

■作品に自然のイメージ

私の作品は自然のイメージなのです。例えば柱を立てる時にも常に森とか林をイメージしながら作っています。きちんと規則的に柱が立つのではなく、ランダムに柱が立つ、それだけで自然の中を歩いているようになります。木と木の間が空いている場所と狭い場所とでは場所が変わり、人の集まり方も変わってきます。そのように自然のイメージを常に頭に描きながら作品を構成しています。

例えば、アルミの板を貼る場合、水の色とか太陽の光を反射して常に色合いが変わるので、自然現象を映すカガミになるのです。それはやはり自然の中で無意



識のうちに自分に養われた空間感覚なのだろうと思います。

■生きていく知恵

長野は、雪は多くありませんが、氷点下一五度位になり、放っておくと水道管がよく破裂しました。暖房も炬燵と火鉢で、学校では薪のストーブ、その周りで弁当を温めて食べました。本当に昔の日本映画のような生活でした。知恵と言えば、漬け物とか保存食です。

僕の育った諏訪は農業の人が多く、皆で一緒に暮らすという精神が強くなりました。農業は水をどう皆でうまく分け合って暮らすかが最大のテーマで、皆で共同しないと成り立ちません。その頃は本当に全てが自然と一体化されていました。

■今後の長野に期待すること

信州だけに言えることではないですが、現代の日本は全体に明るくなり過ぎていくのです。自然そのものの中で暮らすというのは、もう少し暗さとか重さとか、そういう部分をもっと大切にしてほしいという気がします。そのことが自然の美しさにつながっていくと思います。

長野は、東京との地理的な関係も良いですし、空気もきれいですから、これから人々が新しい生活を切り拓いていくには、すばらしい場所だと思います。



伊東豊雄 プロフィール
(いとうとよお)

一九四一年生まれ。建築家。

東京大学工学部建築学科卒業。菊竹清訓建築設計事務所勤務後、伊東豊雄建築設計事務所設立。ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会 (RIBA) ロイヤルゴールドメダル、プリツカー建築賞など多数受賞。主な作品に、せんだいメディアアテック、TODS表参道ビル、多摩美術大学図書館（八王子キャンパス）など。近著に『あの日からの建築』（集英社新書）共著に『建築の大転換』（筑摩書房）など。

特集 1

長野県のダムの魅力

萩原雅紀（ダムライター、ダム写真家）

皆さんは「長野県のダム」と聞いて、どこか思い浮かべるダムがあるだろうか。

まあ長野に限らず、たいいていの人は、ない、ですよね。

中には「黒部ダム」と思う人もいるかも知れない。残念、日本一の高さの黒部ダムがあるのは隣の富山県。

でも、映画「黒部の太陽」など有名な、破砕帯に阻まれながらも努力と技術と根性で貫通させた、黒部ダムへ続くトンネルは長野県の大町市が起点なので、大町市は「黒部ダムの玄関口」的なイメージが強く、地元でも黒部ダム観光が大きくPRされている。確かに黒部ダムの風格や存在感は日本のダムの中でも特別だし、黒部ダムを含む「立山黒部アルペンルート」は山岳リゾートとして魅力的だ。

しかし、ちょっと待っていただきたい。

周囲を二〜三〇〇〇メートル級の山で囲まれ、水量の豊富な川が数多く流れている長野県。魅力という意味で言えば、長野県内にだって黒部ダム

に負けず劣らずのダムがある。そして、ダムの役割という意味で見ると、関西の電力を担う黒部ダムとは違い、われわれ首都圏に住む者にとって切っても切れない関係のダムが数多く存在するのだ。そんな長野県のダムの魅力を、ぜひ皆さんにも知ってもらいたい。

ところで、「長野県」と「ダム」というキーワードを聞いて、多くの人が最初にイメージするのは、二〇〇一年に当時の田中知事が発表した「脱ダム宣言」ではないだろうか。

この政策がもたらした影響は大きく、当時県内で計画中だったダムはすべて中止に追い込まれ、その動きは全国に飛び火した。しかし何より重要なのは、この声明によって、それまで何となく「税金の無駄、環境に悪影響、無用の長物」というようなイメージがつきまとっていた「ダム」というものの、そして治水や利水といった河川行政について、多くの人がさまざまな角度から注目することになったことだと思う。その結果、ダムのデメリットだけでなくメリットにもスポットライト



■日本一大きな黒部ダムがあるのは富山県



■アーチダムでは国内3位の高さの奈川渡ダム



■国道から少し離れてひっそりしている水殿ダム



■上高地や乗鞍へ続く山道の入口にそびえ立つ稲核ダム

が当たるようになって、盲目的な反対論だけでなく、代替案をどうするか、それは実現可能なのか、ダム案と比較してどちらがより現実的か、といった冷静な議論が「専門家」だけでなく一般人レベルでも行われるキッカケになった。

当の長野県内でも、知事から名指しされ「脱ダム」の象徴的存在となった浅川ダムが、一旦は中止になりながらも代替案との検討を繰り返した結果、有効性が認められて中止が撤回されたのは印象的な出来事で、田中知事後を受けた村井知事が「脱『脱ダム宣言』」を発表するなど、改めてダムの効能を証明する結果になったと思う。また、多くの注目を集めたことがダムの魅力発見にも繋がりが、その後、多くのダム好きが生まれてダム鑑賞という趣味が一般化していく要因のひとつになったのは間違いない。

さて、ダム好きから見ると長野県と言えば、まず思い浮かぶのは県の北西部を流れる梓川と高瀬川である。それぞれ飛騨山脈の槍ヶ岳の南と北に源を発し、安曇野市で合流して犀川と名前が変わり、千曲川を経て最終的に信濃川となるこの両河川には、どちらも長野県だけでなく日本を代表する巨大なダムが連続して設置されているのだ。

梓川に建設されているのは奈川渡ダム、水殿ダム、稲核ダムという美しいアーチダム三姉妹、高瀬川に建設されているのは高瀬ダム、七倉ダムという雄大なロックフィルダム兄弟と、大町ダムという重力式コンクリートダム。ちなみに「三姉妹」とか「兄弟」といった表現は筆者の主観なので、観る人

によって「三兄弟」「姉妹」でもまったく構わない。

ここでダムの構造の話をする、アーチダムはコンクリートのアーチ作用で水を支えるもので、ダムと言えはこの形を思い浮かべる人が多いだろう。アーチ状にすることでダム本体（堤体という）を薄くすることができ、つまりコンクリートの使用量を減らして材料費を抑えることができる代わり、水を貯めたときの水圧を直接岩盤に伝えるので、地盤が丈夫な場所でないれば造ることができない型式だ。ロックフィルダムは逆に地質のあまり良くないところでも建設できる型式で、水を塞ぎ止めるための土の壁を立てて、それを上流下流両方から山のように積み上げた岩で挟んで支えている。外観は谷間を埋める巨大な岩の山だ。ダムを造る地質のいい場所が少なくない

ってきた近年では主力と言える型式である。重力式コンクリートダムは、その名の通りコンクリートで造られた堤体の重さで水を塞ぎ止める型式。地盤の強さはそれなりに必要だけど、設計に複雑な計算が必要なアーチダムと比較すればシンプルな構造で、セメントの価格が下がった現在では全国的に数多く造られている。

というわけで、梓川と高瀬川にはダムの代表的な三つの型式が揃っている。なかでも梓川最上流の奈川渡ダムは高さ一五五メートルとアーチダムでは国内三位。このダムの上を通る道路は上高地に向かう国道一五八号線なので、これまで気づかずに通っている人もいるかも知れない。高いだけでなく、堤体が下流側に大きくオーバーハングしていて、ダムの上から見下ろすとまるで空中に浮いているような錯覚を覚える。

そのすぐ下流にあるのが水殿ダム。高さは九五五メートルで奈川渡ダムよりだいぶ低いけど、シンプルなアーチの造形は奈川渡ダムに瓜二つ。梓川でいちばん下流にある稲核ダムは、松本から上高地方面に車を走らせると最初に出てくるダムで、高さは六〇メートル。残念ながらダムの上は立入禁止だけど、橋を渡るとき真横に見えるので大迫力である。

いっぽう、高瀬川最上流の高瀬ダムは高さが国内二位の一七六メートル。山を挟んだ隣の黒部ダム（高さ一八六メートル）と一〇メートルしか変わらないほどの巨大さで、しかもロックフィルダムなので見た目ではこちらの方



■高瀬ダム上流の川は崩壊土砂が押し寄せて地獄の様相



■果てしない高さの岩山、現実離れた光景の高瀬ダム

が何倍も大きく見える。ここはマイカーは入ることができず、下流の七倉ダム湖畔から専用タクシーか徒歩でしか行くことができないけど、初めて堤体を真下から見上げたとき、あまりの大きさと現実離れた光景に思わず笑いながら涙が出てきたほど。ダムとは関係ないけれど、堤体の上からトンネルを抜けて貯水池沿いの小道を進むと、貯水池に流れ込む川の上流が大崩壊して真っ白い石で埋め尽くされた谷の姿を見ることができ。これは夢の中のようにであり、地獄のようでもある景色なのでぜひ見に行ってもいい。

すぐ下流にある七倉ダムは高瀬ダムと同じロックフィルダムで、高さ一二五メートルと日本でも屈指の規模。高瀬ダムを直指して車を運転していると、山道のカーブを曲がった先で巨大な岩山が突然視界に飛び込んでくるので度肝を抜かれる。

長い階段を登ってダムの上まで行くことも可能だけど、膝が笑うこと必至である。

高瀬川が山間部からちやうど平野に出てくる場所にある大町ダムは、高さ一〇七メートルの重力式コンクリートダム。ダム周辺は公園や遊歩道が取り巻いているので、歩き回ってさまざまな角度からダムを眺めることができる。また、平日はダム管理所に申し込みをすれば、何と職員さんの案内でダムの内部を見学させてもらうことができる。プロの解説つきで普段見ることのできない場所に入れてもらえるのだ。勇気を出して、ぜひ管理所のインターホンを押してみよう。



■高瀬ダムの陰に隠れがちだけど十分巨大な七倉ダム



■大町ダムはこのエリア唯一の多目的ダム



■普段は入れない大町ダムの中を案内してもらえる

ところで、ここで名前が出た梓川と高瀬川のダムのうち、洪水を防ぐ役割がある大町ダムを除く五つのダムは、すべて東京電力の発電用ダムである。つまり、長野県は中部電力管内だけでなく、この水力発電所で発電した電気はすべて首都圏に送られて消費されているのだ。そういう意味でも我々の生活に密着している梓川と高瀬川のダム群、少し興味が湧いてきただろうか。梓川のダムにほど近い上信越道の松本インターチェンジまでは東京からでも三時間程度で到着するので、ぜひこのエリアのダムめぐりに出かけて、自分の目で見てほしいと思う。がんばれば両水系のダムを一日でまわることも不可能ではないけれど、ここはぜひ近くで一泊して、温泉やグルメなどとともに、それぞれの河川をじっくり攻略することをお勧めしたい。ゴルフ

で言えばセントアンドリュースとオーガスタのような、美しく、奥が深く、人々を虜にするダムめぐりの名コースなのだ。できれば、両水系のお膝元である松本市や大町市も、黒部ダムだけでなく梓川や高瀬川のダムをもつとPRしてほしいと強く思う。

というわけで、長野県の中でも魅力的な巨大ダムが密集するエリアを紹介したけど、もちろん県内にあるダムはこれだけではない。大きいダムから小さいダム、発電一本槍なダムから洪水を防いだり飲み水や農業用水の補給などマルチな活躍をするダムまで、その地域の特色に合わせたさまざまなダムがある。雪が融けたら、そんなダムたちを見に出かけてみませんか。



萩原 雅紀 プロフィール

(はぎわら まさき)

ダムライター、ダム写真家

1974年東京都出身。写真とデータ、探訪記をまとめたダムのデータベース「ダムサイト」管理人。これまでに訪れたダムは国内外合わせておよそ500基。近頃は「ダムライター」を名乗り、トークイベントやテレビ、ラジオの出演をはじめ、各種メディアでダムの魅力や活躍を一般に伝える活動を積極的に行っている。主な著書に「ダム」「ダム2」(ともにメディアファクトリー)など。

国営アルプスあづみの公園における建設コンサルタントの運営管理業務について

高橋 克典（株）オリエンタルコンサルタンツ

総合マネジメント事業部

一 はじめに

国営アルプスあづみの公園（以下、あづみの公園）は、長野県北西部、北アルプスの懷に位置し、「自然と文化に抱かれた豊かな自由時間活動の実現」「自然の感性性を育む遊・創・空間」を基本理念とし、長野県をはじめ首都圏、中京圏等、三大都市圏に居住する人々の多様な観光・レクリエーション需要に対応するとともに、北アルプス山麓の自然的環境や景観を保全・活用するために国が設置・管理している国営公園です。

そして、次に示す六つの基本方針のもとに整備、運営維持管理されています。

- ① 自然環境の保全・生物多様性に富んだ自然環境との共存を目指した保全活動や啓発活動の推進
- ② 広域レクリエーション：日本を代表する自然環境の中で、安らぎ創出や健康づくりにつながる楽しみを各種体験・学習プログラムを通じて提供
- ③ 景・文化の保全と創出：第一級の

山岳景観と雄大な田園景観が一体となった安曇野地域の景観及びこれを育む豊かな風土・文化の保全と創出への貢献

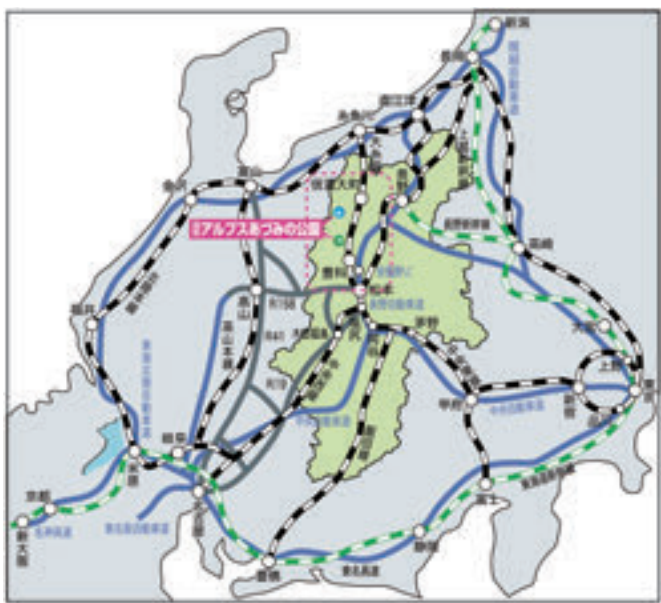
- ④ 交流・地域活性化：公園が地域滞在型観光の拠点となるとともに、園内資源を活用し、地域と連携した地域活性化への貢献

- ⑤ 情報発信：安曇野地域を舞台にして、豊かな自然の中で育まれた風土・文化とこれからの暮らし方についての新たな発見を導く情報発信
- ⑥ 参加：公園の整備・管理運営において、地域、企業、利用者など、様々な立場、多様な世代からの参加を促進

次にあづみの公園は、長野県北西部の安曇野市に位置する「堀

金・穂高地区」と、大町市及び松川村に位置する「大町・松川地区」の二地区から構成されています。まず、「堀金・穂高地区（現供用面積二七ヘクタール）」は、「安曇野入門体験パーク」として、失われつつある安

曇野の田園風景を保全・復元するとともに、安曇野地域の自然・文化を体験できる安曇野地域の玄関口の公園として位置づけられ、二〇〇四年七月開園しました。そして、「大町・松川地区（現供用面



■国営アルプスあづみの公園の位置



■堀金・穂高地区



■大町・松川地区

積七九ヘクタール」は、「安曇野総合体験パーク」として、北アルプスの山岳景観に繋がる良好な自然環境を保全しながら、時間をかけてその自然環境を学び、体験できる公園として位置づけられ、二〇〇九年七月開園しました。

二、建設コンサルタントの公園の運営維持管理について

従来、建設コンサルタントは社会資本整備にかかる調査・計画・設計等のハード面を主体に公共事業に携わってきました。いわゆる、公共的な事業を主体として、国民のニーズを汲み、中立的な立場で保有する技術力を活用して成果を挙げてきました。

そのような中、私たちは、技術領域を広げる試みとして、且つ新しいビジネス分野として、既存技術の延長上にあるソフト部分のマネジメント力、運営管理能力を発揮できる場として運営維持管理業務に進出することにしました。

その結果、あづみの公園の運営維持管理業務を平成二二年六月〜平成二五年三月の二年一〇ヶ月の期間実施することになりました。

実際に運営維持管理を行うに当たっては、一社で全ての業務を行うことはできないので、それぞれの得意の分野を持つ民間企業の共同体により業務分担を行い、運営維持管理を行いました。各社の分担を次に示します。

・代表企業：(株)オリエンタルコンサルタンツ

↓ 全体のマネジメント及び広報、行催事の企画運営

・構成員：(株)富士植木

↓ 建物管理、工作物管理、清掃等

・構成員：物林(株)

↓ 植物管理

・構成員：穂高観光(株)

↓ 収益施設運営(レストラン、売店)

三、国営アルプスあづみの公園における広報、行催事の取組み

私たちが運営維持管理業務を行うに当たっては、前述したあづみの公園の基本理念を理解し、多様なレクリエーションに対するニーズへの対応、地域資源の活用、地域との連携や活性化等に配慮し、より良い公園づくりを目指しました。

その中で、先に示した私たちの業務分担のうちの広報、行催事の企画運営に関する取組みについて記述します。

まず、私たちが特に力を入れたのがあづみの公園の認知度の向上でした。これは、あづみの公園がどのような公園か意外に知られていないことが実感されたからです。すなわち、公園が開園してから間もないこともありましたが、周辺地域の方々から「名前は知っているけど行った事がない」、「イルミネーションの公園でしょ」と言うような話をしばしば耳にしたためです。

そこで私たちは、戦略的な広報の実施、年間を通じた企画の実施を行い、まずは認知度向上に着眼した取組みを実施しました。



■チューリップの花修景



■ツイン・イルミネーション〔冬〕



■ウォーター・プレイ・ガーデン〔夏〕



■コスモス花修景〔秋〕



■あそびのがっこう〔冬〕

次に、戦略的な広報の実施、年間を通じた企画の実施の具体的な例を記述します。

(1) 戦略的な広報の実施

私たちは、あづみの公園の認知度向上と来園者増加のために様々な広報活動を行い魅力の発信に努めました。取組みの一例を次に示します。

- ・ イベント内容、季節、客層に合わせたチラシの発行と広報エリアの検討
 - ・ 地元メディアへ毎週行方ニュースリリースの配信による取材の誘致、協力
 - ・ 関東、中部、関西方面からの集客のための広報活動(個人向け)
 - ・ 学習旅行、募集旅行などの団体客の誘客を目的とした広報(法人向け)
 - ・ 地域と連携した観光情報発信イベントへの参加による広報活動
- また、東日本大震災に伴う首都圏の

夏季の大規模な節電計画を踏まえ、爽やかな高原気候の信州地方への誘客を目的として、地元行政団体や観光施設と協力しながら東京、神奈川で街頭PR活動なども行いました。

(2) 年間を通じたあづみの公園の特性を活かした四季折々の行催事の実施

私たちは、あづみの公園の行催事を企画するに当たり、二地区ある公園を「ツインパーク」としてそのスケールメリット

を活かしたイベントの実施、そして一年を通して各地区の特性を活かしたイベントの実施など、様々な取組みを行いました。取組みの一例を次に示します。

【春】

春は大規模な花修景として、残雪が美しい北アルプスを背景に二九品種・三〇万本のチューリップで園内を彩る風景を演出しました。また、来園者に早春の爽やかな気候を楽しんでいただくようにピクニックグッズの貸出しなどの新たな取組みを行い、公園の特徴を活かした地域の春のおとずれを感じられる企画を実施しました。

【夏】

夏は、涼しい公園を感じられるよう夏ならではの水遊び(ウォーター・プ

レイ・ガーデンや大型アクティビティの導入を行いました。また、二つの公園を結びイベントとして二地区同時開催の日本最大級の昆虫展など、子供たちが喜ぶ夏ならではのイベントを実施しました。

【秋】

秋の花として代表的なコスモス、二八品種三〇万本が園内を彩る「コスモスフェア」を開催しました。また「わんぱくチャレンジ広場」として、大型エアー遊具やサッカー教室、などスポーツをテーマにしたイベントを開催し、子供達に様々なイベントに挑戦してもらいました。

【冬】

安曇野地域の観光オフシーズンである初冬の地域活性化を目的として、周辺自治体や観光施設と連携を図りながら、二地区で約六〇万球のイルミネーションを使用した長野県最大級のイベントである「ツイン・イルミネーション」を初冬の安曇野の風物詩として開催しました。

また、雪を活かした様々な雪遊びイベント「雪の巨大迷路」「そり遊び」などを開催して、子供たちに雪の公園を楽しんでもらいました。更に、寒い日でも安心して来園できる企画として大規模な屋内イベント「昭和の横丁」「あそびのがっこう」なども開催して、公園の施設を生かした企画を実施しました。

(3) 地域連携による行催事の実施

地元自治体と連携して「あづみの公



■北アルプスフェア

園早春賦音楽祭」や、広域にわたって開催するスポーツイベント「アルプスあづみのセンチュリーライド」、「北アルプス山麓ツーデーウォーキング」、地元の魅力を発信するイベントとして「安曇野フェスタ」「北アルプスフェア」など地域と連携した様々なイベントも開催しました。

(4) 様々な自主事業の開催

私たちは、民間事業者としてのノウハウを集結して運営費に頼らない企画もしました。公園内で人前式を行う「パークウェディング」、日本初の建設足場を使用した「3D迷路」、震災復興支援コンサートとして歌手の加藤登紀子さんを招いて一夜限りの「スペシャルコンサート」などを実施しました。また、「北アルプススリレーマラト



■3D迷路



■北アルプススリレーマラトン

※自主事業：公園の利便性や魅力をより一層高めるため、運営事業者である我々の提案による独立採算性の事業

ン」では関東方面から多くのランナーが参加するなど新たな公園の魅力や価値の向上に努めました。

(5) 地域を超えた新たな交流事業の実施
「海と山と丘の公園交流事業」として横浜市にある日本丸メモリアルパーク、神奈川県立相模原公園と一緒に、県や市といった枠を超えて公園管理者同士がそれぞれの地域の自然や文化を発信し、公園間での交流イベントの企画や広報活動を行いました。

四 おわりに

私たちが二年一〇ヶ月の間、様々な広報活動や、年間を通じた様々な行事の実施、またお客様に安全かつ安心してご利用いただける公園づくりを心掛け、おもてなしの精神のもとサービス向上を心掛けた結果、平成三三年度には開園以来初の年間入園者数が五

〇万人を突破することができました。しかし、私たちが行ったあづみの公園運営維持管理において、「地域活性化」「地域と連携した取組み」「地域の雇用の創出」「地域経済への貢献」などに寄与し、定着したかは定かではありません。すなわち、業務に携わるなかで本当に地域の人々とコミュニケーションができていると実感できたのは三年目だったからです。

このように、この課題に取組むには三年間は非常に短いと感じます。一方で、三年間という短い期間を有効に活かして地域との関わりを実現するためには、民間企業としての特徴を真に活かして、素早く地域へ溶け込み、次に時間をかけて地域の方々とのコミュニケーションを行う必要があります。今後、新たに運営維持管理に取り組む機会があった場合は、これを念頭に地域への関わりを実現していきたいと思えます。



高橋 克典 プロフィール

(たかはし かつのり)

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 総合マネジメント事業部 主幹

1970年 神奈川県横浜市生まれ

1995年 関東学院工学部建設工学科卒

2001年まで建設会社に勤務。その後、建設コンサルタント会社に転職、再開発事業、公園、道路などの設計業務に携わる。2010年から2013年まで「国営アルプスあづみの公園運営維持管理業務」のセンター次長として全体マネジメント、広報、企画に携わる。その後、指定管理業務など包括管理業務に取組んでいる。



■日本メモリアルパークにおける交流イベント

特集3

玉村 豊男（長野県原産地呼称管理委員会 会長）

千曲川をワインバレーに！

原産地呼称管理制度から地域の活性化へ

いま、日本ワインが各界の注目を集めています。

「日本のワイン」ではなく、「の」を取って「日本ワイン」と呼ぶ習慣も、ワイン愛好家を中心にしだいに広まってきました。

その日本ワインの躍進の先頭に立っているのが長野県であり、その背景には、十年あまり前からおこなわれている原産地呼称管理制度によって、長野県のワインが著しい品質向上を見せた、という事実があります。長野県の原産地呼称管理制度は、二〇〇二年に田中康夫氏が知事に就任したとき、県産農産品のプロモーションのために協力してほしいと、ソムリエの田崎真也氏と私に電話をかけてきたのが発端でした。

長野県で生産された農産品を、県外に売り込むためにはどうしたらよいか。

やらなければならないことは明白でした。長野県の農産品というからには、まず、それが本当に長野県内でつくられたものであることを証明すること。広報や宣伝は、それから

後に続くものです。つまり、長野県という原産地の呼称を公的に管理する、「ウンをつかない」制度を確立することからはじめなければならぬ、という認識は、田中、田崎、私の三者間で一致していました。

三者が頭に描いていたお手本は、フランスにおけるワインの原産地呼称管理制度でした。ヨーロッパでは、中世の頃から同様の取り組みがおこなわれてきました。最初はロックフォールのチーズ製造者の組合であるともいわれていますが、自分たちが地域で生産した農産品の評価を守るため、勝手に産地を名乗る外部の模倣者を取り締まり、自分たちもまたその評判を落とさないよう、自発的に基準を設けて品質を管理しよう、というのが、この制度のはじまりだといわれています。その伝統が受け継がれて、フランスが誇る農産品であるワインの分野では、早くからこの制度が確立していました。

原料のブドウが県内の畑で栽培されているか、醸造は県内の施設でおこなわれているか、瓶詰めから出荷

まですべて県内でおこなわれ、県内で課税されて出荷されているか。これらの基準をすべて満たした上で、中立的な審査員による官能審査（注1）によって、品質が一定のレベルに達していると認められるものだけが認定を受けることができるといのがこの制度で、発足とともに、田崎真也氏が筆頭に、この人の評価なら誰も文句が言えないという、ワイン業界の権威といわれる人物をずらりと並べた官能審査委員会が結成されました。

最初の審査では、エントリリーしてきたワインの半数以上が官能審査で落とされ



■ヴィラディストガーデンファームから千曲川ワインバレーを望む

（注1）ヒトの感覚器官を使って行う検査。旧大蔵省醸造試験所において利き酒審査をこう呼んでいた。



■垣根仕立ての栽培によるワイン用ぶどう畑

ました。エントリーするだけでも、品種や糖度のほか、製造過程におけるいくつかの基準をクリアしなければならぬのですが、そこをパスしても官能審査で落ちたのです。最初の回は私も審査員として参加したのですが、田崎さんと確認したのは、「これが長野県のワインです、といってフランス人に出すことができるか」という基準です。つまり、世界的な基準から見ても合格か否か、というレベルで決めようという了解でした。フランス人が認めなくても、地元ではみんなおいしいといっているのだから合格にしよう、というレベルで採点すれば合格率は八割を超えるかもしれないが、それでは進歩を促さないで厳しくやりましょう、というのが私たちの考えだったのです。

古くから地元の人を相手にワインをつくってきたメーカーの社長さんの中には、地元で愛されているワインを否定するのか、審査員は俺たちの会社を潰す気か、といって怒鳴り込んできた人もいました。

しかし、十年前に反発を示したメーカーも、いまでは「原産地呼称管理制度があつてよかった、おかげで品質が向上した」といつてくれます。実際、回を重ねるごとに全体のレベルが上り、しだいに「長野県のワインは品質がよい」といわれるようになっていったのです。

長野県は、塩尻市だけが山梨県と並んで明治時代からワインをつくってきた先進地ですが、それ以外の地域は新興の産地ばかりです。

日本では栽培しやすく収量も多いアメリカ系の生食用ブドウ品種でワインをつくるのが長くおこなわれてきたのですが、塩尻では先駆者が苦難の末、メルローなど欧州系のワイン専用品種を育てることに成功した歴史をもち、いま県内の全域に続々と増えている新しいワイナリーでは、高級ワインができる欧州系専用品種の苗木を畑に植え、収穫を待つて畑のそばにつくったワイナリーで醸造するという、昔から世界中でおこなわれてきた、農業としてのワインづくりが、あたりまえのようにおこなわれています。

日本のワインづくりは、生食用を加工にまわす、という段階から、一九七〇年代以降ワインを飲む習慣がしだいに浸透して急激に消費量が増えると、苗木を植えているのでは間に合わない、外国から安いワインを買ってブレンドしたり、濃縮果汁を輸入して水で薄めてワインにしたり、手っ取り早く売れるものをつくらうと、まるで工業製品を生産するようにワインをつくったのです。

この悪習は、いまも先進地には負の遺産として残っていて、現在の「国産ワイン」の八割以上は（一〇〇〇円以下のワインはほとんど全量が）そうした外国原料が混ざった「国産ワイン」であると考えられています。そのために、いまでもワインの生産量はブドウ畑のない神奈川県（輸入原料の荷揚げに便利な横浜港に近い）が日本で、ブドウ（ワイン用品種）の生産量（注2）が日本一である長野県を大幅に上回っているのです。

（注2）平成22年。特産果樹動態調査（農林水産省）



■ヴィラディストガーデンファームのカフェ（2F）とワイナリー（1F）

しかし、日本でも、品種を選んで丁寧に栽培すれば良質のブドウができ、それを仕込めばおいしいワイン（国産ワイン）ではない「日本ワイン」ができるというところが、しだいにわかってきました。長野県の実地呼称管理制度の発足はその流れに倣差すものであり、そうして長野県ではよいブドウからよいワインをつくることができる、という評判が高まるにつれ、自分でも実践してみようと思う人が増えてきたのです。

日本ばかりでなく、いま世界中で、ワインをつくる人と地域が増えていきます。かつては、おいしいワインはフランスでなくてはならないとか、石灰岩質の地中海沿岸でなければワイン用のブドウは育たないとか、多くの人が思い込んでいましたが、いまではタイでもインドでも中国でも、ビックリするほどおいしいワインが続々と生み出されています。それは農業技術の進歩とインターネットに

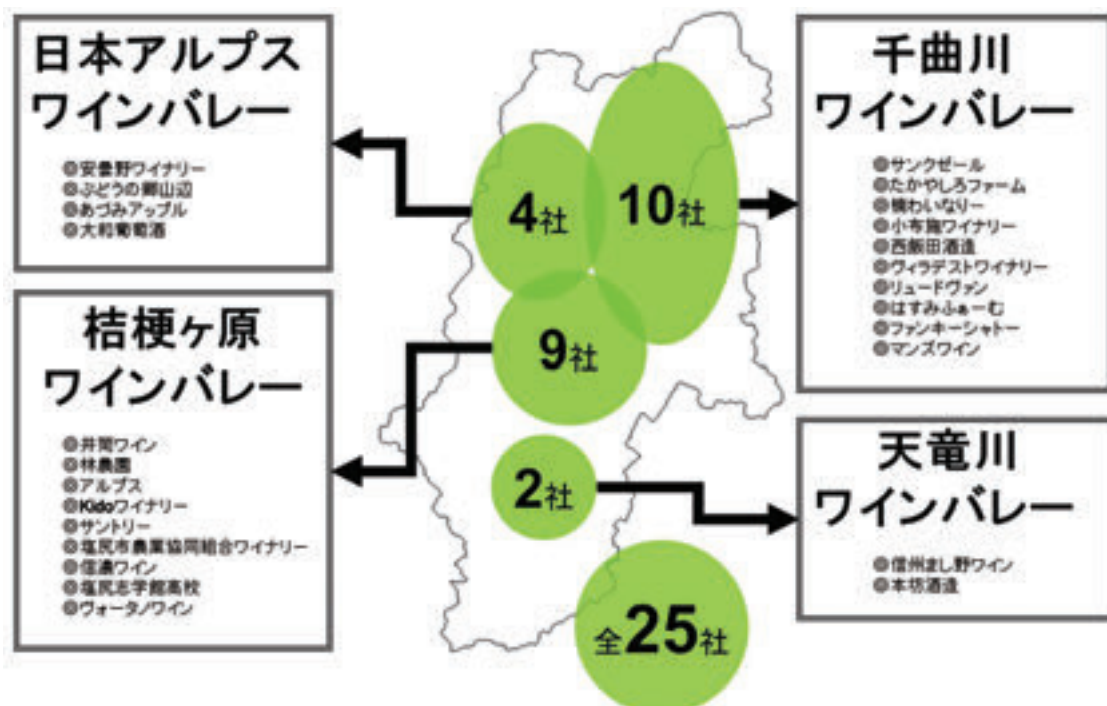
よる情報環境の変化がもたらしたものです。フランスやイタリアでなければ……という神話の呪縛から解放されて世界中でワインがつくられるようになった、その流れに日本が、なかでもとくに新しい産地である長野県が乗った、ということでもあるのです。



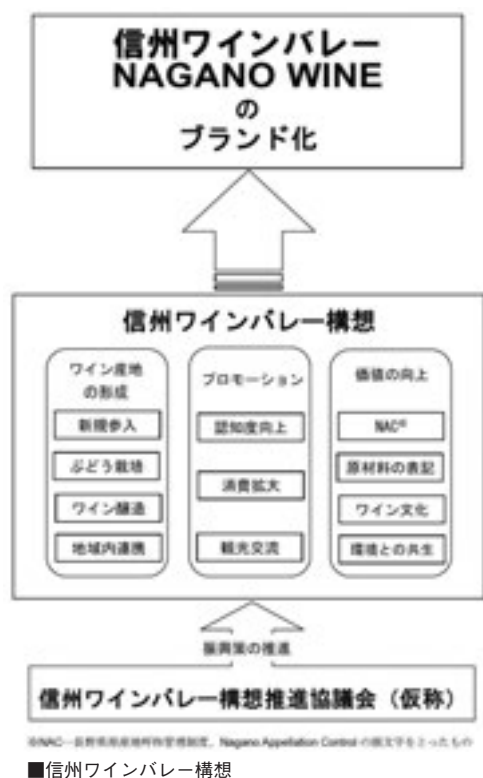
■ワイナリー（醸造所）のワイン樽とワイン充填機（右）とコルクをはめるコルカー（左）

(注3) 流路延長三六七km長野県内で二一・三・五km 新潟県では信濃川と名を変える。

千曲川ワインバレーというのは、長野県を南東から北西に向かって流れる日本一の大川である千曲川(注3)の沿岸に、小規模ワイナリーが集積することによって生まれる新しい地域社会をイメージしています。



■長野の4つのワインバレー 出典：信州ワインバレー構想（平成25年3月長野県）



■信州ワインバレー構想

大きなメーカーが大規模なワイナリーを建てるのと違って、個人が立ち上げた小規模ワイナリーが広い範囲に数多く集積すると、それぞれの個性的なワインとそれを生んだ語り尽くせない物語を求めて人びとが集まるようになります。

ワイナリーが増えればシヨップができ、ホテルができ、観光をはじめとするさまざまな産業が刺激されて経済が活性化するでしょう。

そしてなによりも、ブドウを育てワインをつくって暮らすという、農業をベースにしたライフスタイルが地域に定着することによって、一定の範囲内でモノとカネが動くことで地域住民が互いに互いを潤す、安定

した地域社会を持続的に手に入れる希望をもつことができるのです。

私が東御市にワイナリーを立ち上げて醸造をはじめたのは二〇〇三年のことです。その後「千曲川ワインバレー」地域には新しいワイナリーが五社増えて現在では合計十社を数えますが、これから三年以内にさらに三社程度は増える見込みです。しかも、それらのあとを追って新規参入を希望する予備軍は後を絶たず、東御市内だけでも一〇人以上の移住者が将来のワイナリーオーナーを目指して畑を耕しています。もしこのまま「千曲川ワインバレー」が順調な発展を遂げたとすれば、一〇年あまり前の原産地呼称管理制度からはじまった新しい流れは、いまから一〇年後にはこの地域にどのような景観を作り出していることでしょうか。



玉村 豊男 プロフィール

(たむら とよお)

長野県原産地呼称管理委員会会長

1945年東京都杉並区に、画家玉村方久斗の末子として生まれる。
 1971年東京大学仏文科を卒業。在学中にパリ大学言語学研究所に2年間留学。
 1977年に『パリ 旅の雑学ノート』、1980年に『料理の四面体』を刊行
 1987年より絵画制作を年より再開し、1989年長野県上田市で初個展。
 1991年より長野県東御市在住。東御市ではワイン用ブドウ、西洋野菜を栽培する農園ヴィラデストを経営。
 2002年 長野県原産地呼称管理委員会会長に就任。
 2003年10月に酒造免許を取得し「ヴィラデストワイナリー」を開設、
 2004年4月に「ヴィラデスト ガーデンファーム アンド ワイナリー」を開き、ワインとともに食事を提供している。
 長野県「おいしい信州ふど(風土)」大使。
 「信州ワインバレー構想推進協議会」会長。
 最新刊は『千曲川ワインバレー』(集英社新書)

東日本大震災の翌日に被災した栄村の記録

〈長野県北部地震からの復旧・復興〉

島田 茂樹（長野県 栄村長）

はじめに

栄村は、長野県七市町村の最北端に位置し、境界は新潟県津南町、十日町市、湯沢町、上越市および群馬県中之条町並びに長野県飯山市、野沢温泉村、木島平村、山ノ内町に接している。広ぼうは東西一九・一キロメートル、南北三三・七キロメートル、周囲一〇六・〇キロメートル、面積は二七・五二平方キロメートルの広大な村です。地形は複雑で千曲川最下流に位置し、役場の標高は長野県で一番低い二五六メートルです。周囲には苗場山（二四五メートル）島甲山（二〇三七メートル）佐武流山（二二九メートル）など二〇〇メートル級の山々が聳え、高低差の激しい中を千曲川、志久見川、中津川等の大小河川が環流している。豪雪地として知られている栄村は、昭和二〇年二月、七メートル八五センチの積雪が記録されており、過去六九年間の最高積雪の年平均は三・一三センチとなっている。人口は平成二五年九月現在、二一八五人、世帯数九

〇六世帯（村内の特別養護老人ホーム施設入所者 八〇世帯を含む）が、三一の集落に点在している。高齢化が進み半数の集落は六五歳以上が五〇％以上を占めている過疎・豪雪の村です。

地震の被害状況

平成二三年三月一日の東北大震災（後に、東日本大震災と改称）の発生から 一三時間一三分後の三月一二日未明の三時五九分、残雪が二メートル近く残っていた栄村と新潟県津南町の県境付近を震源とするマグニチュード六・七、震度六強の地震が栄村を直撃した。村長以下職員も道路事情等で早急に登庁できず、ようやく午前六時に災害対策本部を役場に設置した。その後も六弱二回、五弱二回の大きな揺れと余震もひっきりなしにあり、危険を感じたので村民全員の避難を決定し、消防団員の応援のもと秋山地区（一〇世帯、二四〇人）は役場から三〇キロメートル離れているためほとんど被害が

なく避難の必要がなかったが、それ以外の地区民全員に避難指示を発令した。今まで、役場職員はもちろん村民誰もが避難生活の経験が全くない中、役場、小・中学校、公民館等の避難所七箇所に緊急避難をしていただき、最大一七八七名（収容延べ人員二二六二二人）が避難指示解除までの一日間を劣悪な条件での避難生活を余儀なくされました。この間、消防団員、消防署、警察署の皆さんには徹夜で各集落の警戒に当たっていただきました。お陰で窃盗などの事件が一件もなかったと聞いています。また、役場職



■実りの秋の景色（月岡地区）



■中条川上流被災状況



■青倉集落被災直後の状況



■森集落被災状況

いたいただき実施しました。震災で住居が半壊以上となるなど、自宅に戻れなくなった被災者のために、仮設住宅等の住居の確保が必要となりました。長野県が仮設住宅の建設に着手、敷地にはまだ大量の雪が残っていたため、重機による除雪を行いながら、震災から

員も男女を問わず全員が庁舎で、或いは避難所で村民と寝食を共にし、不眠不休で被災者の支援にあたり、更に長野県、姉妹都市武蔵村山市、近隣市町村など各方面から消防団員の応援、給水車対応、保健師派遣等のご支援をいただき、またボランティアの大勢の皆さんからのご協力をいただきました。地震発生時の犠牲者はなかったが、避難生活中に

体調をくずされて三名のお年寄りの方が病院でお亡くなりになり地震関連死となりました。地震が早朝であったので外に出ている人もなく、炊事の仕度時間でもなかったため火災も発生しなかったこともあり、負傷者は軽症者が一〇名と少なかった。家屋被害については、翌日から全集落の「被災建物応急危険度判定」を実施、危険（赤色）一六〇件、要注意（黄色）二八四件、調査済（緑色）三三六件、合計七八〇件に調査票が貼られました。また、「被害認定調査」では全壊（三三棟）、大規模半壊（二一棟）、半壊（一四八棟）、一部損壊（四九二棟）、合計六九四棟の判定を実施し、これに基づき「罹災証明書」を発行しました。これらの調査につきましましては、長野県建築士会、長野県、近隣市町村の絶大なるご協力を



■JR飯山線（横倉～森宮野原）法面崩落により線路の路盤が抜けた状況→ H23.4.29復旧運行再開（写真はH23.8.17）



二か月後の五月一四日に、北野天満温泉駐車場に五戸が完成し、その二週間後に横倉の農村広場グラウンドに三五戸が完成しました。さらに、追加の一五戸は一か月後の六月一八日に完成し、合わせて五五戸の仮設住宅が完成、村外へ避難していた方も柴村に戻って生活することができ



■路肩が崩壊した村道（H23.3.15）→復興状況（H24.9.18）



るようになりました。仮設住宅での生活は、広さや設備、使い勝手に至るまで普通の住宅のようにはいかず、入居者からの不満もありましたが、全国の多くの方々からの物心両面にわたってのご支援、激励とボランティアのおかげで、入居者も元気に仮設住宅での暮らしを続けることがで



■中条川にかかる中条橋（青倉地区）→ H24.1.29積雪347cmによる崩落→ H25.8.9の様子



■多くの方々からの心温まる励ましのメッセージ

きたと思います。

復旧・復興状況

仮設住宅では不自由な生活を強いられたが、震災から二年半が経過し、住宅については自力で再建した方や、村が災害公営住宅一八棟（三一世帯分）を建設し、平成二十四年一月に高齢者等が入居され住宅困窮者は皆無となりました。公共施設、農地もほぼ復旧しましたが、道路は県道一ヶ所、村道二ヶ所（橋梁一基含む）が未復旧ですが、今年度中には全て復旧の見込みです。一方復興事業は、地震直後国道一七号が交通不能となり、迂回路がないため物流も滞ったこともあり、長年要望してきた県道の迂回路線建設が決定しました。計画では、千曲川に橋梁二本を架設し、二キロメートルの未開通区間の解消を図るもので、今年度から橋台の工事が始まることになりました。また、地震で取り壊した家屋、土蔵等から貴重な古文書、古民具がたくさん発見されたため、これらの保存展示施設を計画、廃校となった古い小学校の



区 分		被害状況	被害額(千円)※
農地・農業用施設		田・畑 832箇所	532,360
		農道 137箇所	
		水路 134箇所	522,400
		ため池 5箇所	
計			1,054,760
農業関連施設・機械	村有施設	農林産物処理加工センター、堆肥センター、農産物処理加工施設	39,166
	共同利用施設・機械	培養センター、ライスセンター、育苗センター、乾燥調製施設、育苗施設 等	99,793
	個人所有施設・機械	菌茸施設 20棟	377,518
		畜産施設 10棟	259,611
		作業所、格納庫 物置 等	474,080
		直売所 26施設	66,400
		コンバイン、トラクター、田植機 等	101,700
計			1,418,268
農産物	菌 茸	しめじ、えのき、しいたけ、ひらたけ 533t	173,746
	畜 産	肉牛 26頭、生乳 4,200リットル	13,178
	水 稻	米	75,406
	野 菜	アスパラ、トマト 等	7,661
計			269,991
公共土木施設	道路・河川等	国・県道 47箇所	2,346,886
		村 道 212箇所	1,683,940
		河 川 2箇所	91,249
		急傾斜地 1箇所	93,813
	林 業	治山等 14箇所	4,129,000
		林 道 5箇所	14,333
		計	
上下水道施設		簡易水道 13施設	248,258
		農業集落排水 公共樹等49箇所、管路709.7m	56,485
		合併浄化槽 195基	90,810
計			395,553
福祉・医療施設	保育園	外壁、受水槽、ボイラー 等	25,935
	高齢者総合福祉センター	防火扉、屋根融雪用配管、機械設備 等	72,090
	老人福祉センター	内装、設備 等	1,223
	診療所	内装、床 等	3,731
計			102,979
観光施設	スキー場	リフト、センターハウス、車庫 等	61,578
	温泉宿泊施設	4施設	123,531
	その他	絵手紙収蔵館、物産館、百合居温泉	
商工施設		51事業所	187,282
計			372,391
教育施設	小学校	校舎、プール施設、体育館、グラウンド 等	128,995
	中学校	校舎、プール施設、体育館 等	78,488
計			207,483
社会教育・文化施設	公民館	全壊2棟、大規模半壊1棟、半壊3棟、一部損壊15棟	101,471
	旧東部小学校	体育館	35,490
	農村広場	多目的グラウンド、管理棟 等	7,146
	文化会館	照明設備、音響設備 等	2,342
計			146,449
住 宅		全壊 33棟、大規模半壊 21棟、半壊 148棟、一部損壊 492棟	4,564,126
計			4,564,126
行政施設等	役場庁舎	外構、電気施設、給排水施設 等	33,075
	消防施設	ポンプ小屋12棟、消火栓5基、防火水槽4槽	29,542
	その他	駅前駐車場、消雪パイプ施設、ケーブルテレビ関連設備 等	30,460
計			93,077

※・・・被害額は災害復旧に係る事業費又は推計額のため、今後精査が進むことにより、大きく変動する可能性があります。

被害総額 16,984,298 千円

■公共施設等の被害状況（平成25年1月31日現在）

校舎を改修する計画を進めています。

地元建設コンサルタントの役割

復旧・復興にあたっては、地元の方々やボランティアの皆さんを初め、多くの方々による支援があつて現在に至っていますが、多くの積雪が残る震災直後の現場の状況確認や被災箇所の計測については、地元建設コンサルタント、測量企業が村職

員や建設業の方々と共にこれにあたりました。

特に道路交通の遮断による救援物資の輸送に影響が出ることは、応急復旧への大きな妨げになることが予想され、被災直後の被害状況の確認を早期に終えることが望まれました。応急復旧後、本復旧調査を三月一日から開始しましたが、雪解けが進むにつれ、路肩や法面等の被害が次々と判明し、五二路線二二箇所が確認されました。

その後、国の災害査定を受け、ようやく復旧工事を発注することができました。災害時における地元建設業の役割と共に、被災箇所の計測、その後の復旧のための設計等建設コンサルタントの役割についても再認識することができました。

おわりに

全国各地から心温まる支援物資や、一三九〇〇件余の個人、企業の



島田 茂樹 プロフィール

(しまだ しげき)

長野県 栄村 村長

経 歴	昭和16年 2月	長野県飯山町（現 飯山市）生まれ
	昭和34年 3月	長野県立飯山北高等学校 卒業
	昭和37年 5月	長野県 栄村役場吏員（～平成11年 3月）
	平成13年10月	長野県栄村 収入役（～平成17年 9月）
	平成17年10月	〃 助 役（～平成19年 3月）
	平成19年 4月	〃 副村長（～平成20年 1月）
	平成20年 5月	〃 村 長（～現在 2期目）
趣 味	溪流釣り／山菜採取	
座右の銘	行雲流水	

皆さんからの寄付金・義援金、大勢の皆様によるボランティア活動など被災者支援や復旧活動へのご支援をいただきましたことに対し心から感謝を申し上げます。過疎と豪雪の小さな村ですが、元氣を取り戻し、活力と魅力あふれる村づくりを目指して頑張る所存です。

建設コンサルタンツ協会関東支部では、会員企業の若手社員同士の交流や情報交換、若手社員の声を支部活動へ反映させることを目的に、若手の会を発足させました。

■建設コンサルタントで働くきっかけ

司会——今回は、建設コンサルタントを知らない方も多い学生さんに、建設コンサルタントの苦労や魅力を知って欲しいと考え、若手の会の技術者の方、関東支部の支部長にお集まりいただきました。まず始めに、皆さんが、建設コンサルタントで働くことになったきっかけをお聞かせ頂けますか？

山本——私は、機械が専門で、先輩も後輩も教授も含めて誰も建設コンサルタント業界は知りませんでした。そういう環境のなかで建設コンサルタントに入社したいと思ったのは、「ODAをやりたい」と考えたからです。

コンサルタントの仕事というのは図面を描くだけだと思っていたのですが、入社してみると、想像以上にカバールしている範囲が広いというのが印象的でした。

玉江——私も、建設コンサルタントという業界は知りませんでした。当時、鳥取に住んでいて、水質汚染の問題が新聞でも話題になりました。その時に「こういう事を検討するコンサルタントって面白そう」と思ったのがきっかけでした。

荒木——私は、神戸に住んでいましたので阪神大震災で被災しました。その時に、一番困ったのは水です。水汲みは、僕ら子供の仕事という生活が半月ぐらい続きました。

そのようなことがあって、大学を選ぶときも

座談会

建設コンサルタントで働く！

長谷川伸一 山本浩樹 秋津理恵子 玉江祥和 荒木隆夫

2013年10月7日（月） 於：東京国際フォーラム G601会議

水関係がいいなと思っていましたし、大学でも水に関わる研究室に入りました。そして、大学で勉強したことが活かせるような土木に興味を沸き今、に至っています。

秋津——私は、環境システム学科という学科でしたが、内容的には土木寄りではなく、システム工学を勉強しつつ、都市計画系や建築といった要素もあるような学科でした。建築に興味があつて入ったのですが、いろいろ勉強するうちに、「都市計画って面白いな」と感じました。システム工学の考え方やマネージメントにも興味が沸き「こういう仕事をしてみたい」と思うようになって、建設コンサルタントという職種を知りました。

長谷川——私の時代は皆さんと「少し」違って、映画「三丁目の夕日」の時代です。道はそんなに舗装がされていない、環境も自然の景色などきれいなところがある一方、ごみ捨て場のようなところもありました。これからの日本と考えたときに、ものづくりとか設計に憧れていたものですから、自然と土木というのが頭のなかにありました。

■建設コンサルタントは知られていない

司会——今の時代は、便利すぎてなかなか土木に目が向かないかもしれないですね。

長谷川——社会環境が変化しても社会の要請に応える仕事という理解は変わらないと思いますが、昔に比べて安全や生活が便利になっていくことへの一般の人の関心が失われつつあるのかもしれないですね。

玉江——若手の会の話し合いでも、建設コンサルタントとは何か、ということを少しアピールし



たほうがいいのでは、という話は出ています。

他の業界の人に「仕事は何をしているの?」と聞かれて、「建設コンサルタント」といつても理解されなくて、特に下水道というと、地面の下の話で全く興味を持ってもらえない。

山本——もし下水道が、社会資本が、世の中になかったら、と想像してもらえるといいのだけども……

我々の世代にはなかなかピンとこないのが正直なところですよ。

長谷川支部長はそのような時代を経験されていると思いますが、この悩みをどう見られますか。

長谷川——私の時代は、急峻な地形や厳しい自然環境、地震が多く狭い国土にあって、安心安全な国民の生活を自分たちが創り守っていくという意義を感じていました。別に人に知られてなくても、社会貢献しているという技術者としての自負もありました。

決して押し付けがましい話ではなく、現に社会資本が生活を支えているという事実を、そのまま素直に理解してもらえれば、自ずと社会資本整備に対する理解も頂けると思っています。

今日は下水道の専門の方がいらっしゃいますが、特に地下に埋まっている下水道は、毎日使っているのに必要性やありがたさが理解されないでしょうね。

■ 社会資本のありがたさ

玉江——本来は、下水道は分かりやすく、水洗に変わる有り難さ。経験した人は感じたけれど、今の人はレバーを回せば流れるのが当たり前



■ 既存の道路を考える上で外せない、交差点調査 (秋津氏提供)

になっている。

山本——親の実家に行けば、岐阜の山奥ですが、まだ汲み取りですよ。

長谷川——でも、不便だけど、実家に帰られたらほっとする面もあるでしょう。何でも近代化して便利にすることだけが仕事でもない、自然環境とか、良い面は残しながら、よりよくしていくのがこの仕事の難しいテーマですね。

荒木——便利とか不便というより、たぶん僕らの仕事は、あって当たり前のものをつくることだと思うのです。大きな橋やスカイツリーみたいなのは、たまにある特殊な仕事。ほとんどは感謝されないけれど、必要で、誰かがやらなければならぬ仕事、それを僕らがやっている、そういうMっ気というか気概というか、それが必要なのだと思います。

僕はあんまり自分の仕事は何かと言われても、うまいこと言えない。全く知らない他の人に説明するなら、「下水道の設計で、お前らの〇〇〇の処理している」そう言うでしょうね。

■ 建設コンサルタントの魅力

長谷川——世の中の人に解ってもらいたい、伝えるべき私たちの仕事の魅力は何なのでしょう。今は、いろいろな世界から建設コンサルタントに飛び込んでくる人も居ます。例えば、会計士とか弁護士、山本さんのような機械や電気もそうです。彼らは、建設コンサルタントに魅力を感じてこの業界に入ってきたはずですよ。そもそも皆さんは、ものづくりとしての土木に魅力を感じているのでしょうか？

秋津——私はありきたりですけど、自分の設計

したものが地図に載るといいうのを、死ぬまでには経験してみたいです。土木で橋をつくったのならその橋はいろいろな人に使ってもらえて、その橋に何か思い入れを持つ人も居るかもしれない。これは魅力的ですよ。

山本——秋津さんが言っているのと同じだなと思ったのですが、例えば毎年雨が降って洪水がするところに堤防ができたなら、それってすごい変化ですよ。建設コンサルタントの魅力というのは私のなかでは、変化に関われることです。

荒木——僕は下水道なので、出来上がると煙たがられる変化も多いのですが、僕らの本当の成果は最後に出てくる。どれだけ川がきれいになったとか、海がきれいになったとか、そういうところが最終的な変化なのかなと、今の話を聞いていて思いました。だから、「ここで海水浴ができるのは僕らのおかげだ」となりますね。分かりにくい、やっぱり下水道は不利だなと思います（笑）。

■ 変化の余地

長谷川——世の中の人々は、トイレに行って水を流しても、そのことと川の水が綺麗か汚いかはなかなか結びつかない。その間には、下水道もあるし、下水処理場もある。そのお陰でトイレの便利と水の綺麗が共存しているのですけど。

玉江——そうですね、特に下水は効果が出るのに時間が掛かる面もあって、神田川も昔は汚かったのが、今はすごくきれいになっています。その間にはいろいろな努力があるのですが、なにしろ時間が掛かる。

長谷川——日常の生活に変化があった時に、「これは誰が考えて創ったのだろう」と思ってくれる



■ 景観への配慮も大切な下水処理施設管理棟（玉江氏提供）



■ 大規模なシールド工事もある下水道（荒木氏提供）



■ 鮎が戻るまでになった神田川

と有り難いですが、そこまでは多分思わないですよ。

司会——変化も余地というのがあって、例えば途上国や、昔の日本はとても不便で、変化の余地がたくさんあったから期待もあったし喜びも感じましたと思いますが、だんだん変化のギャップが縮まっているのかもしれないね。

長谷川——そういう意味では、『三丁目の夕日』の時代は、変化が目に見えました。なぜ今の若い人が海外志向なのかというと、海外の仕事は変化が目に見える。同じ理屈で、東日本大震災の仕事でも、若い人に行ってもらうと、それまでとは全く人が変わって帰ってくる。

山本——確かに変化の余地が減ってきているから、単純に「良いものを作ります」とアピールしても響かないのですね。当たり前にあるものが使い続けられるありがたさ、ここをどうやって理解してもらうか、かもしれません。

長谷川——今まであたりまえにあったが、実は本当に必要なものが何かを置き去りにしてきたところがありますよね。自分たちにとっては、社会資本整備をやって喜ばれるのは当たり前だし、たとえ喜ばれなくても、荒木さんが言われたように自己犠牲の上に立っているという充足感で納得してしまっていた側面もあります。

■ 大変なところ

司会——話は変わりますが、建設コンサルタントの仕事で大変なところってどこでしょう？

秋津——私は自分ができなくて上司に迷惑が掛かるのが…。上司が客先に「すみません」と言って頭を下げているのを見ると、「本当にすみませ

ん」と思います。でも、申し訳なく思う気持ち
が、自分を成長させてくれると信じています。

山本—— 一種の責任感ですよ。それは、その
業務のリーダーになっても同じですよ。自分の
仕事が遅れると工事発注も遅れてしまうとか、ず
っとつきまとう責任感はあると思います。

荒木—— 確かに、発注が遅れるとか、期限が決
まっている場合は、それに対してやらなければい
けない、そういうしんどさもありますけど、逆に
計画系の仕事では、終わりが見えないくらいさあ
りますよね。

ある人は「ここまでやっておけばいいか」と
言うけれど、ある人は計画なのに、設計の半分
以上やってしまう。

長谷川—— そういう仕事のやり方をしていると、
労働時間が長くなるし、「大変だから嫌だ」と思
いませんか。

荒木—— 僕が思うのは、仕事をもらったときに
終わりが大体描けるものと、自分で描いていかな
ければならないものがある。「どっちが面白い？」
と言われたら、当然、後者ですよ。

でも考えてみて下さい、そんな仕事ばかり
ワツときたら（笑）。そりゃ、任せて貰えた仕事
ですから、ちゃんとやりますよ。「いいものをつ
くりますからやらせてください」と言うかもし
れません。しかし、これもやらなければいけな
い、あれもやらなければいけない、「そのうえに
これですか！」ってなる時もありますよ。

山本—— 掛け持ちはつらい、というところに賛
成したいです（笑）。

秋津—— 私は終わりが見えない仕事はつらい、
というところに賛成します（笑）。

長谷川—— 建設コンサルタンツ協会でも、今話



■ 震災で被害を受けた防潮堤、社会資本整備の重要性を再認識した（山本氏提供）



■ インフラ整備が熱望されている海外の仕事

題に出たような労働環境の問題は、魅力ある業界
への大きな課題でもあり、経営のリスクでもある
し、改善しなければいけない問題だと捉えていま
す。

難しいのは、単に規則を厳しくして、時間管
理される制度にすればいい、とも言切れない
部分です。皆さんおっしゃるように、先の見え
ない仕事のつらさ、は同時に、自分で道を創っ
ていく魅力でもありますから、そこを強制的に
時間で区切ることが魅力的な仕事に繋がるとも
思えない。

玉江—— 実は今まで会った上司の中で、だいた
い五時から六時の間に帰る、でも打ち合わせは全
部一緒に来てくれるし、仕事は全部完璧にやって
いて、仕事の進め方の指示もしてくれて、ミスが
あってもフォローしてくれる、完璧な人がいたの
です。そういう人を見ると、自分もこうなりたい
というモチベーションに繋がります。

長谷川—— 学生時代でも、落第点を取らないた
めに、勉強しないとといけない、一方で、遊びに行
きたいという欲求もあったと思うのです。皆さん
ちゃんと卒業されているのは、上手にマネージメ
ントされてバランスを取ってきたからですよ。な
さっと仕事も同じだと思うのです。

例えば、「今の仕事から何割減らすと長時間労
働はなくなりますか？」と聞いても、恐らくこ
の世界の技術屋さんは時間があればあるだけ仕
事をしてしまうのです。

山本—— 確かに、仕事が半分になったから時間
が半分になるかという、そうならないだろう
な、というのは感じますね。

長谷川—— まあ、仕事が半分になっちゃうと、
会社ももたないのだけだね（笑）。

山本——逆にいうと、すごく忙しいから、一生懸命考えて、効率的に仕事をしている。適度な仕事量でも同じように効率的にやれないか……もしかしたら、働き方を変えることで良くなる余地があるかもしれませんね。

玉江——時間があればあるだけやってしまおうというのはよくわかります。もともと良くなる余地があつて、答えがないのです。前の上司に教えてもらったのは、「答えはない、どちらが妥当かだ」ということです。そう考えると、マネージメントする立場の人が、どこかでストップをかける必要があるのかもしれない。

長谷川——たぶん、答えはそこなのです。今は、マネージメントする人が担当者と一緒に現場の仕事をしてしまっている。本来は、自分の経験から「この仕事は、ここをゴールにしない」と正しく指示しないといけない。玉江さんがおっしゃっていた「すごい上司」はそれがちゃんと出来ていたのだと思うのです。

私は「意思とマネージメント」と言っているのですが、それをしようという意思と、実行するためのマネージメント力が必要なのです。

■ 将来の夢

司会——最後に、皆さんの将来の夢とか希望をお聞かせいただけませんか。

山本——支部長のプロフィールを拝見したときに四〇年間以上でしょうか、コンサルタントという業界に関わって来られたんですね。ふと、今から四〇年後とか五〇年後にどんな仕事があるのだろうかと想像してみました。先ずきて、あまり浮かばなかったですが、社会資本を維持管理するこ



荒木隆夫

若手の会
株式会社 東京設計事務所



玉江祥和

若手の会
株式会社 建設技術研究所



秋津理恵子

若手の会
株式会社 長大



山本浩樹

若手の会代表
八千代エンジニアリング
株式会社



長谷川伸一

建設コンサルタンツ協会
関東支部 支部長
パンフィックコンサルタンツ
株式会社 代表取締役社長

とや使い続けることが絶対テーマになるとは思いました。

私は、「劇的な変化をつくりたい」と思ってた入社しましたが、仕事を通じて理解が深まってくると、今あるものを使い続けることがいかに難しいか、維持することの醍醐味も感じるようになってきました。

玉江——私は、下水道に限らず、いろいろな分野に関わって、将来的には剣術も格闘も出来る魔法使いのようなオールマイティーな技術者になりたいですね。

秋津——私も、いろいろなことをやるようになりたいと、思っています。今は、主に道路の仕事ですが、街づくりの仕事もしてみたいし、住民に関わる仕事もしてみたい。

きつと大変だと思えますけど、いろいろな技術を持って、上手くまとめて「いいね！」と皆に言ってもらえたら素敵だなと思っています。

荒木——皆さんしっかり考えておられて、ちょっと圧倒されている感じなのですが、僕はまず資格を取りたい。給料が上がりますから（笑）。

僕の場合、会社では、「サッカー部の荒木」なんです。そこから一歩レベルアップして、「計画の荒木」でもいいし「函渠の荒木」でもいい、両方できたら理想的ですが、そんなに器用じゃないので、たぶんどちらかになるでしょうね。そのためには、若手を引っ張っていきけるような位置に、技術的にも人間的にも上げていきたいと思っています。

長谷川——維持管理も更新も大事ですが、新しく必要になるものも当然出てくる。建設コンサルタントの仕事が無くなることは無いし、技術がいらなくなることもない。

私は会社でも協会活動でも、「この業界は人材が財産だ」と言い続けています。そしてその人材が持つ技術を継承していかなければならないという思いがあります。

そのためには、多くの人が集まってくる業界、働いている人が魅力を感じる業界にならなくてはいいけない。今日の座談会でいくつもヒントが出ていましたが、それはきつと、皆さんが一歩踏み出し、壁を打ち破っていくことでいくらでも可能だと信じています。

長谷川伸一（建設コンサルタンツ協会 関東支部支部長 パシフィックコンサルタンツ株式会社 代表取締役社長）

一九四七年六月、大阪市で生まれる。一九六六年にパシフィックコンサルタンツ株式会社に入社し、働きながら大阪工業大学工学部土木工学科に通い、一九七一年に卒業。大阪支社第一技術部長、九州本社長、大阪本社長、事業統括本部長などの要職を歴任し、二〇〇八年二月に代表取締役社長に就任。現在は、加えて、建設コンサルタンツ協会・副会長、及び関東支部・支部長、AJCE理事、社団・財団評議員、理事等も務めている。二〇一〇年には、心臓中核欠損手術を受けるが、現在至って健康。趣味は読書、ウォーキング、カラオケ、お酒他。

山本浩樹（若手の会代表 八千代エンジニアリング株式会社）

一九八四年、神奈川県秦野市生まれ。二十九歳。二〇〇七年、新潟大学工学部 機械システム工学科を卒業。二〇〇九年、新潟大学大学院 自然科学研究科を卒業し、八千代エンジニアリング株式会社に入社。河川水門、排水機場、ダム水門、道路排水設備、トンネル設備、消雪設備などの機械設備設計に従事。社会人五年目。趣味は、秦野市の管弦楽団でのホルン（ホルン歴十四年）、語学と海外一人旅。



■ サッカー部の荒木からのレベルアップ



■ 影で支える維持管理の醍醐味

これまでに、韓国、ネパール、インド、中国をバックパッカーで旅行、来年はウズベキスタン！

秋津理恵子（若手の会 株式会社社長）

一九八六年、静岡県田方郡函南町生まれ。二十四歳。二〇一二年、芝浦工業大学システム工学部環境システム学科を卒業し、株式会社社長大に入社。道路交通部に所属し、渋滞対策・事故対策の対策検討や対策効果評価、デマンドバスや自転車交通等の地域交通整備業務に従事。社会人二年目。趣味は、音楽鑑賞、読書、散歩（ただ歩く、田舎ならなお良し）、今年の夏は、幕張で行われたサマソニックに行ってきました。

玉江祥和（若手の会 株式会社建設技術研究所）

一九七七年、大阪市城東区放出生まれ。三十六歳。二〇〇一年、鳥取大学大学院工学研究科社会開発システム工学科を卒業し、日本理水設計株式会社に入社。二〇〇八年に転職し、株式会社建設技術研究所に入社。流域別下水道整備総合計画、下水道全体計画、下水道事業計画、都市計画決定などの下水道汚水計画及び合流式下水道改善、浸水対策などの雨水計画全般及び河川計画に従事。社会人一年目。趣味は、フットサル、シュノーケリング。

荒木隆夫（若手の会 株式会社東京設計事務所）

一九八二年、兵庫県神戸市生まれ。三〇歳。二〇〇七年、徳島大学大学院 工学研究科 建設工学専攻を修了し、株式会社東京設計事務所に入社、下水道グループに配属。浸水被害の軽減、地震対策、公共用水域の水質改善、合流式下水道の改善、バイオマスエネルギーの活用、処理水並びに汚泥の有効利用、下水道施設空間の防災的な活用等に従事。社会人七年目。趣味は、月に数回のフットサル、年数回の登山、読書（好きな作家・伊坂幸太郎）

司会 広報委員長 浅野 泰弘

広報委員 千田純也



- 1 現在の利根川の様子(羽生市より下流方面)
- 2 明治27年当時の権現堂川と利根川「この地図は、国土地理院発行の2万迅速図・仮製図を使用したものである。」
- 3 昭和21年当時の権現堂川と利根川「国土地理院撮影の空中写真(1946年撮影)」
- 4 平成21年現在の権現堂川と利根川「国土地理院撮影の空中写真(2009年撮影)」
- 5 利根川改修計画第Ⅲ期工事 昭和2年権現堂川締切の図
「提供元 国土交通省利根川上流河川事務所」
- 6 現在(茨城県猿島郡五霞町川妻)の様子
「提供元 国土交通省利根川上流河川事務所」
- 7 1594年に南流していた会の川の締め切りを行った記念の碑。
- 8 川俣の渡しに設けられた番所。明治2年頃まで機能していた。

坂東の原風景

利根川東遷事業

広報委員会 千田純也

「坂東太郎」の異名を持つ利根川は、河川の規模としては最大級にして、日本を代表する河川の一つであり、また首都圏の水源として必要な役割を有している。しかしかつて「暴れ川」として流域に幾度となく被害を与え、洪水の度にその流路が変遷する河川でもあった。そこで江戸初期から河川改修工事が行われることとなり、この一連の土木事業を利根川東遷と呼んでいる。

東遷の目的

東遷事業の目的・理由について実はよく解っていない。当時の詳細な記録が残されていないからである。しかし以下の目的であったのではないかと考えられる。①地先の洪水対策②新田開発③江戸の洪水防衛④舟運路の確保⑤伊達政宗に対する防備。

東遷の開始

利根川は本来、渡良瀬川と別流となつて埼玉平野を南下し東京湾に流れていた。その河道を人為的に東へと追

いやって銚子から太平洋へと流出する現在の姿にした。これを利根川東遷というが、江戸初期から昭和初期まで四百年以上かけて行われてきた一大事業なのである。

事業の始まりは文禄三年(一五九四年)会の川の締切工事とされている。当時の利根川は川俣で二手に分かれ、南へ分岐した会の川は後の古利根川筋を南下していた。この会の川を新郷(羽生市)で締切って東流させ、浅間川に瀬替えした。

第二次改修は二十七年後行われた。元和七年(一六二一年)新川通と赤堀川の開削工事である。まず浅間川の流頭・佐波から栗橋まで二里余りにわたる幅七間の新川を開削して渡良瀬川と合流させた。一方、赤堀川は栗橋から関宿、境までの人工河川であり、利根川、渡良瀬川水系と鬼怒川、常陸川水系との分水嶺を切り開き、二つの水系を結ぶものだった。

第三次改修は寛永一二年(一六三五年)からである。関宿から金杉までの十八キロメートルに新たな水路を開削して金杉以下の太日川に繋げた。さ



国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所

「三三三k mの大河誕生物語 利根川の東遷」
国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所

【図面提供】
5、6「利根川近代改修の始まり」

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行



5	4	3	2
6			1
8	7		

らに寛永十八年（一六四一年）江戸川通水のため権現堂川を開削した。この時、権現堂川から庄内古川への流入口は閉じられ、渡良瀬川に合流した利根川は江戸川を流れるようになった。このようにして利根川本流は権現堂川筋を流れ、関宿から江戸川にはいったのである。また同じ年、逆川が開削された。関宿から北に向かい、境町で常陸川に合流する水路が逆川である。この工事により利根川は流域を変え常陸川にも流れるようになった。

第四次改修は承応三年（一六五四）からで、赤堀川の水深をさらに三間分増加させた。この工事により利根川の幹川が権現堂川から赤堀川に移った。

【参考文献】
「利根川東遷 人によって作られた利根川の謎を探る」 著者 澤口 宏
株上毛新聞社 平成十二年五月二十五日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

東遷の完成

て常陸川への流域変更が完成した。

明治三十三年（一九〇〇年）から

政府は洪水防衛を目的として利根川改修計画に着手した。工事は三期に分かれ二〇年間継続事業として実施された。昭和二年（一九二六年）に権現堂川が縮切られ、承応三年（一六五四

年）から二派に分かれていた利根川は二七二年目にしてようやく全流量が赤堀川を流れることになり、「利根川東遷事業」は完成したのである。

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

株信山社サイテック/信山社出版
平成十三年十一月三十日 発行

「利根川の変遷と水郷の人々」著者 鈴木 久仁直
嵩書房印刷 昭和六十年十一月二十日 発行

「アークイブス 利根川」監修 宮村 忠 編集 アークイブス
利根川編集委員会

ニュースの裏側

社会資本の老朽化対策で活躍する建設コンサルタント

広報委員会 片山 剛巨

笹子トンネル事故

二〇一二年二月二日、山梨県大月市笹子町の中央自動車道上り線笹子トンネルで、天井のコンクリート板が約二三〇Mにわたって落下し、走行中の車複数台が巻き込まれ、多くの死傷者がでる痛ましい事故が起こった。この事故のニュースは、多くの国民に、我が国の社会資本が安全性を脅かすほど老朽化している実態を知らしめることになった。

このニュースの裏側で、事故や顕在化した諸問題を受けて活躍する建設コンサルタントの存在を紹介する。

応急措置とつづきの一斉点検

国土交通省は、事故発生直後から道路管理者であるNEXCOや管轄自治体などとともに、全国の同種トンネルの緊急点検を行い、一月二三日には五十七トンネルの安全確認を発表した。また、同月二十七日には、異種ながらもジェットファンなどの重量物を有する全国一四〇〇余りのトンネル、更に翌二〇一三年六月には、標識や照明などの付属物を有する全国八三〇〇余りのトンネルの安全確認を発表した。

これらの点検・調査の多くは、建設コンサルタントを中心とするチームで行われる。長年培った技術力により、重機や機器を用いた点検、劣化状況の把握、原因究明及び対策工法の提示などが主な業務内容である。勿論、作業中における通行者への配慮など、安全管理が絶対的な条件である。

根本にある社会資本の老朽化問題

一方で、社会資本の老朽化という根本的な問題への対策も急務である。我が国の社会資本の多くは、一九六〇年代から一九七〇年代の高度経済成長期以降、急激に整備されており、それが現在一斉に老朽化している。今後二十一年間で、建設後五〇年以上経過する社会資本の割合が急速に高くなる見込みであり、例えば道路橋は、その割合が二〇一二年三月の約一六%から、一〇年後には約四〇%、二〇年後には約六十五%へと急増する。

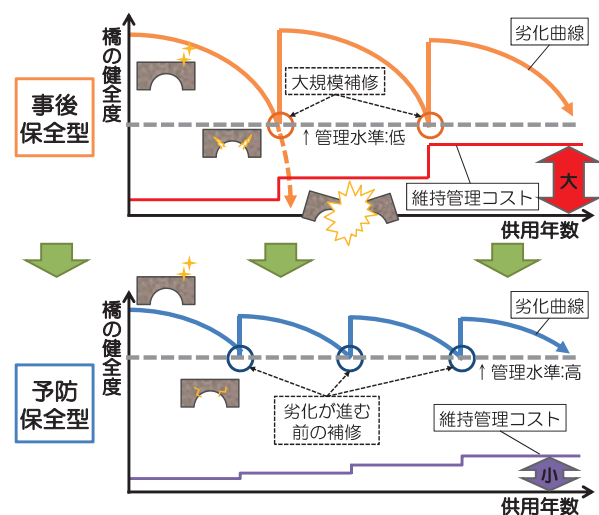
当然、今後の維持管理・更新費の増大が見込まれており、推計では二〇一一年度から二〇六〇年度までの五〇年間に必要な更新費は約一九〇兆円との試算である。しかし、そのうち約三〇兆円分（全体の約一六%）については、現状、予算の確保が難しいとされている。維持管理・更新費の不足により、適切な管理が行われないことになれば、社会資本の機能不全や老朽化により、甚大な事故や災害等を引き起こす可能性が懸念される。

この問題に対し、国や地方自治体では、長寿命化計画やアセットマネジメントなど、限られた財源の中で、保有する社会資本を戦略的に維持管理・更新する施策を積極的に進めている。それら検討や計画を受託し、施策のサポートを行っているのも、建設コンサルタントである。

対象となる社会資本は、道路（橋・トンネル含む）、下水道、河川管理施設（水門など）、港湾施設、公園、公営住宅、公共施設など多岐にわたる。建設コンサルタントは、まず現地調査や大量のデータ整理により、各社会資本の現況や問題点を把握する。その上で、より安く、より長く活用するために、劣化・損傷が酷くなつてから大規模補修工事を行う「事後保全型」から、酷くなる前に軽微な補修工事を行う「予防保全型」への変革を勧め、社会資本に係るトータルコストの削減と延命化に向けたマネジメント



トンネル内の付属物（照明灯）の点検作業の様子



橋における予防保全型への変革イメージ

ト計画の推進に取り組んでいる。

求められる現場力と計画力

国土交通白書によると、国土交通省は二〇一三年を「社会資本のメンテナンス元年」と位置付け、今後社会資本の老朽化対策に重点的に取り組むそうである。しかしながら、国や地方自治体の人材不足は慢性的であり、今後社会資本の老朽化対策において、建設コンサルタントが活躍すべき場面が増えることが予想できる。

最近の現場では、官民学が一体となった新技術やハイテクなIT技術による点検・調査手法が発達してきている。一方、机上においては、「選択と集中」の発想により、人口減少時代に適した社会資本の総量縮減を考慮したマネジメント手法が必要とされている。現場力と計画力、双方を鍛えた建設コンサルタントの活躍が、社会資本の老朽化対策という社会問題においてますます期待されている。

社会のニーズに応える



溝口 伸一さん

日本工営株式会社
社会システム事業部 副技師長

聞き手——これまでどの様な仕事をされてきましたか。

溝口——平成元年に入社以来、都市計画を中心とした仕事をしてきました。とは言っても、これまでダム周辺の環境整備計画、地域活性化手法の検討、P・I（パブリックインボルブメント）手法を用いた道路網整備の検討、国営公園のASETマネジメント計画の策定、広域地方計画の検討、震災復興計画の策定、テロ対策に至るまで、様々な仕事に関わってきました。現在は、日本企業による新興国へのインフラ輸出展開に関する業務を行っています。

聞き手——まさに様々な業務を経験されていますが、その中で心に残る仕事は何ですか。

溝口——それも多々あります。入社

してすぐに担当した導水路整備計画では発注者の指導を受けながら仕事をしましたし、三年目に経験した景観形成計画では卒論テーマであった景観計画の技術的な課題の何たるかが実務を通して実感できました。その他、政策を行政と共に考えるという答えの無い仕事も経験しました。初めてで苦労したことも多かったのですが、時代の変化に応じた仕事を経験出来たという点では恵まれてきたと思います。

聞き手——それでは、溝口さんにとって建設コンサルタントとは何ですか。

溝口——これまで、社会ニーズに応じて提供すべきものは何なのか、数年後を見据えて仕事を追いかけてきました。そこで感じるのは、建設コンサルタントの役割が多様化する中で、シンクタンクと競合

する機会が増えるなど、業態や業界の境目が無くなっているという事です。それに伴って、経済や経営工学といった知識も必要となつていきます。つまり、社会に貢献するという基軸の中で、コンサルタント、エンジニアとして何ができるのか、何をしたいのか、といった自分の思いを実現出来る業界であると言えます。

聞き手——これから目指す技術者像は何ですか？

溝口——これまで日本国内で様々な業務を開拓してきましたが、それが形をなして

きているので、実施してきたものをきちんと形にして後輩たちに伝えていきたいと思っています。

また、今後はインフラ整備が急がれるアジアの新興国に日本の技術、経験、ノウハウを投入し、アジアの都市を健全に発展させていくことに貢献していきたいと考えています。

聞き手——最後に、これから建設コンサルタント業界を目指す人にアドバイスをお願いします。

溝口——建設コン

サルタントは、国や地域づくりに貢献する業態であり、計画・設計、維持管理といった形でその方向性を具体的に絵柄にしていける役割を担っています。更には、時勢と共に取り巻く環境が変化し、対処すべき課題も変化していきます。それら変化を常に先取りし、課題解決の方向、処方箋を提案していくことが今後より一層不可欠になってきます。是非とも、そうした世界に魅力を感じて欲しいです。



■高層ビル建設が進み足元では人々が二輪車や自動車で混雑するなど日本の高度経済成長のような活気を感じさせるベトナム国ハノイ市

橋に新たな命を吹き込む

聞き手——これまでで一番心に残った出来事は何ですか。

木藤——最近では、やはり東日本大震災後に三陸鉄道の調査を担当した時のことです。自然災害の脅威を見せつけられました。人間が築いてきたものが跡形もなく流されてしまっていましたから……。言葉では言い表せないくらいです。一日も早い復旧・復興を目指す必要があると思います。

聞き手——そんな木藤さんにとって、「橋」に携わるコンサルタントの魅力とは何ですか。

木藤——ひとつの業務を行ううえで



■首都高速道路 鶴見航路橋（つばさ橋） 横浜市



■国道48号 熊ヶ根橋 仙台市

木藤——国道四十八号の熊ヶ根橋は、約五〇年前に作られた幅員六mの橋梁ですが、既存の構造物を極力利用しながら拡張することにより、機能を強化し生まれ変わりました。新設橋梁のような華々しさはありませんが、今あるものを生かしつつ、補修・補強によって甦らせるといった事業が、技術者としての集大成だと今は考えています。そのためにも今まで

ました。
聞き手——では、これからの技術者とは？



き どう
木藤 幸一郎さん

日本交通技術株式会社
執行役員鋼構造部長

自分自身が経験してきたことを活かしながら日々研鑽し、より良い構造物の建設や維持管理に携わることができたいと思います。また次世代を担う技術者を育てていくことが、もうひとつの役割だと考えます。

聞き手——最後に、これからを担う若手の皆さんにアドバイスをお願いします。

木藤——設計でも製作でも施工でもいいですが、自分自身が携わった構造物がそこに残ることが最大の魅力だと考えます。私自身、車で遠出することが少なくありませんが、そこを通るときには、色々なことが思い出されます……。『地図に残る仕事』という言葉はありますが、地図に残らなくとも「心に残る仕事」ができると思います。是非、多くの若い技術者の方々にも経験していただきたいと思っています。

連動企画

「日本の土木を見に行こう」同行記

広報委員会 浅野泰弘

驚きの毎日小学生新聞とのタッグ

建設コンサルタンツ協会では、五〇周年記念事業の一環として、毎日小学生新聞とタッグを組んで、毎日親子特派員ツアー「日本の土木を見に行こう」との企画をしているという。メジャーなマスコミと一緒に、このような企画をするのは、建設コンサルタンツ協会としては、恐らく初めての試みだと思ふ。

毎日小学生新聞に掲載された募集記事を見ると、なかなか本



■毎日小学生新聞に掲載された募集記事



■バスの中では映画「黒部の太陽」が上映された

格的で、面白そうな企画である。これは、関東支部広報委員会も同行取材だ、という話で盛り上がりつつあった。うわー、また僕の休日が……

さてよ、せっかくだから、娘を誘ってみよう。休みの日に娘を一日面倒見ると言えば、妻も喜ぶだろうし、娘に父親の仕事を伝えるのにも良い機会かもしれない。同行取材にも厚みが出るだろう、我ながら良いアイデアである。

ドライに振られる

若干、同行取材よりも、個人的な理由が目立ってきたような気もするが、そこは気にしない。募集記事を見せて「大きな橋やダムが見られるよ、きっと美味しいものもあるよ」と誘ってみる。

しかし、「行かない、ガールスカウトのキャンプだから」と即答されてしまった。

これは残念……、しかし断るに

しても、行きたいけどとか、残念だけれどとか、あるだろう、と思うが、我が子ながら全くドライな断り方だ、交渉の余地が無い。

仕方ない、一人で行ってこよう。うん、きっと美味しいものがあるだろう。

車中では黒部の太陽の上映会

さて、出発当日、毎日新聞本社前に朝八時に集合である。結構早いけど、最近、歳なのか早く目が覚めるので意外と辛くない。うれしいような悲しいような。

早々と集合場所に着く、協会からは、橋、ダム、河川の三分野の技術者が説明者として同行するらしい。



■シャボン玉が舞う上野スカイブリッジ



■建設コンサルタント技術者による橋についての説明会



■巨大地下空間を目の当たりにして驚きの声があがる



■いよいよ突入



■美味しいもの！

また、毎日小学生新聞と建設通信新聞から、記者の方が取材に来ている。なかなかの力のいれようだ。

当日はあいにくの雨の予報。まだ降り出していないが、今にも降り出しそうな雲行きで少し残念。

行きの車中では、自己紹介が終わると、なんと映画「黒部の太陽」が始まった。「えっ、これ子供に分かるの？」という声も聞こえるが、たぶん分かるだろう。小学生は大人が思うよりずっと理解力があるから。

ただ、土木って恐ろしいな、と誤解されそうな気もする。そ

ちちが心配である。あんなおつかない現場もおつかない親父もフィクションもしくは昔の話のはずなのでご安心を。

シャボン玉が舞う上野スカイブリッジ

最初の目的地、上野スカイブリッジにバスが到着した。到着した場所はコテージが並んでいて「まほ

ーばの森」と書かれている。ちょっとしたキャンプ場のようなものである。少し興味をそそられたが、一行は寄り道せずに上野スカイブリッジを目

指す。

トンネルを抜け、橋を渡ると、関東一の規模を誇る鍾乳洞、不二洞へとつながっている。

上野スカイブリッジは、深山をまたぐ長さ二二五m、高さ九〇mの歩行者用の吊り橋で、観光用に定刻になると橋の上からシャボン玉が舞う。この日もシャボン玉が舞って、子供達は大喜び上がりである。

どうして橋は真ん中が高いのか

さて、橋を渡ると、鍾乳洞があるはずだが、今回は土木ツアーなので、鍾乳洞には行かずに、橋梁技術者による橋講座が始まる。上野スカイブリッジの特徴や橋の形式の説明が行われる。

質問コーナーでは、「どうしてこの橋はまっすぐじゃなくて、中央付近が少し盛り上がりつつあるの？」という質問があり、「人が沢山乗った時に、ちょうど真っ直ぐになるように設計されているからです」と橋梁技術者が答える。おおーっと感嘆の声があがり、なかなかの滑り出し。

巨大地下空間

午後の見学は、上野ダムの東京電力神流川発電所である。バスは、上野村森の体験館に到着した。神流川発電所は地下深くにあり、大型観光バスでは入っていけないため、ここで上野村のマイク口バスに乗り換えるのである。

神流川発電所は、長野県側の南相木ダム湖と群馬県側の上野ダム湖との間で揚水発電を行う発電所で

ある。夜間電力を使って、南相木ダム湖に水を上げておいて、電力使用量の多い昼間に発電しながら、上野ダム湖に水をもどす、なるほど電力を位置エネルギーに置き換える超巨大バッテリーということである。二つのダムの間にある発電所は、地下五〇〇mに設置されていて、その巨大地下空間が今回のお目当てである。マイク口バスは、長い地下トンネルを抜けて、発電所の入り口に到着する。ヘルメットを被り、五〇〇mの暗闇と書かれたシャッターの前で注意事項の説明を受ける。なんだかSFっぽい雰囲気期待感をより一層盛り上げる。扉が開き、我先にと中に入る。上を見上げて息をのむ、そこには期待通りの超巨大な地下空間が広がっていた。高さ五十二m、幅三十三m、長さは二六mだそうである。うーむ、広い、高い、カッコいい！

掘削技術と大空間を支えるPSアンカー

この大空間は、山裾から工事用トンネルを掘り、最初に中心となるトンネルを掘削し、そこから左右に掘り進め、大空間の天井となるアーチ部を作り、次に一段階に分けて徐々に掘り下げていったそうである。壁には、1ベンチ、2ベンチと一段階を示す表示がある。

壁や天井一面にある大仏様の頭のようなボツボツした物は、PSアンカーである。地盤は非常に強固であったが、地下五〇〇mの岩盤には、一平方あたり、一三〇〇トンというものすごい力が掛かる。そのため、



■GEO E SITEの看板の前での記念撮影



■堅い岩盤コアの展示

この地下空間は力を分散しやすい卵型にすると共に、PSアンカーを壁面全面に打ち込んでいる。壁面が崩れないように、アンカーを入れて引っ張っているのである。

見学路の途中には、直接岩盤に触れられる仕掛けや、事前調査のボーリングで採取されたコア（地層サンプル）の展示等があり、いかに堅い岩盤であったか、堅いからこそ、安定しているということが実感できるように工夫されている。

建設コンサルタント技術者の意地

神流川発電所の見学が終わると、上野村ふれあい館で、おみやげを買って、観光バスに乗り換えて、帰路につくこととなる。

本当は、この後、上野ダムを見学したかったようだが、降り出した雨が本降りになり、時間もおしいため、残念ながらダム見学は中止となってしまった。

中止となったが、そこは建設コンサルタント技術者である。車内で即席のダム講座、河川講座を開講した。揺れる車中でパネルを見せながら、一生懸命説明したが、時間も時間、子供達は旅の疲れもあり、反応はやや低調であった。うーん、晴れていて、ダムを目の前に説明していれば反応も違ったのだろうけど、こればかりは仕方がない。そんな悪条件の中でも、予定通りやり通す建設コンサルタント技術者の意地は見せたぞ、と思ひましよう。

次代を担う子供達へ

後日（一〇月二二日）、「日本の土木を見に行こう」のツアーのレポートが、毎日小学生新聞に掲載された。三面にわたる特集記事である。毎日小学生新聞は、発行部数九〇〇〇部だそうで、多くの小学生が目にしてくれることだろう。

土木は、人々の暮らしを支えているが、それこそ地下のような目に見えない所にあたり、道路や橋のように目に見えても、あることが当たり前になってしまっていたり、なかなか普段その価値を感じて貰える機会は少ない。

建設コンサルタント

は、不器用でアピール下手と言われるが、これからも縁の下力持ちを続けていくためには、次代を担う子供達に土木の必要性を伝えていく努力がきつと必要なのだろう。

私も、今回は娘に振られてしまったけど、自分の会社が設計した橋やダムを見せに連れて行ってみたいなど思っていた。連れて行かないまでも、通った時にちよつと話すくらいはしてみようかな。うーん、分かつてはいるのだけど、どうにもちよつと恥ずかしい。



■毎日小学生新聞に掲載！



■車中でのダム講座

地域委員会だより～長野地域委員会

■県分裂の危機を救った県歌『信濃の国』

“信濃の国は十州に 境連ぬる国にして…”は、長野県民に親しまれている県歌であります。明治9年に長野に県庁を置く長野県と松本に県庁を置く筑摩県が、松本の筑摩県庁舎の焼失を機に政府の命により長野県に吸収合併しました。しかしその後は、北（長野）と南（松本）は激しく地域対立を繰り返していました。

明治32年に音楽教師であった浅井^{キヨシ}冽は、県の統一化を願いこの曲を作詞しました。昭和23年に分県問題で県議会が紛糾した時、議会傍聴席から「信濃の国」

の大合唱が突然始まり、興奮する議員を諷め分県の危機はこの歌により救われました。『信濃の国』は、長野県民にとって貴重な文化遺産といえます。



■ 上高地の風景

長野地域委員会 委員長 山本 和明（株式会社 長野技研）

■長野地域委員会の活動

急峻な地形に囲まれ自然災害が発生しやすい長野県で活動する長野地域委員会では、地域貢献や技術力向上、後継者育成を目標に以下の活動を行っております。

●ボランティアによる道路防災点検

この活動は今年で6年目となりますが、豪雨・地震の異常気象が発生した場合、長野国道事務所所轄の県内の骨格となる国道18号、19号、20号を対象に、近傍に在住する会員が緊急点検を行い被災の状況を管理者に報告し、道路管理者の迅速対応のための支援を行います。



■ 道路防災点検の活動状況

●技術向上のための技術研修会

地域に貢献できる技術者の技術力向上を目的に、施工技術・防災技術・新技術等をテーマに関係する行政機関に協力していただき、最近では以下の技術研修会を開催しました。

- ・H24河川施工技術に関する技術研修会(河川災害、河川サイフォン：千曲川河川事務所)
- ・H23道路防災技術研修会(山清路道路防災:長野国道事務所)
- ・H21、H22道路施工技術研修会(中部横断自動車道：長野国道事務所)

●長野県内学生の就労支援

県内高校の学生を対象に会員企業がインターンシップを受け入れ、建設コンサルタント業務の実務や学校にはない設備・ソフト等の体験により、県内企業への就労促進につなげる活動を行っております。

長野地域委員会 技術委員長 柳澤 俊明（株式会社 タイヨーエンジニア）

支部紹介 関東活動

私たち一般社団法人建設コンサルタント協会関東支部は、本部の下に九支部が組織されたうちの一つで、一都八県（東京都・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川・山梨・長野の各県）を担当エリアに、本部の活動方針を受けて主に、次の諸活動を展開しています。

1 社会資本整備の展望と建設コンサルタントの将来像

(1) 社会資本整備の今後のあり方

(2) 建設コンサルタントの新しい役割提案

2 建設コンサルタント活動の高度化・適正化

(1) 技術力による選定の拡大・普及

(2) 履行期間及び報酬体系の適正化

(3) 技術力向上と成果品の品質向上

(4) 環境配慮行動の推進

3 コンサルタント活動の基盤整備

(1) 登録制度及び再委託制度の適正化

(2) 技術開発の支援

(3) 経営基盤安定・強化の支援

4 倫理の保持

5 市民に向けた発信

関東支部では二〇〇七年（平成一九年）に支部独自の方針である「関東グロークールビジョン2007」を策定し、その方針のもとに諸活動を展開してきましたが、この度新たなビジョン「関東グロークールビジョン2014」中期行動計画を策定中です。（平成二十六年四月の定時総会で決定予定）組織の見直

しは終了し、次年度から更なる飛躍を目指して活動を展開致します。

各組織とその代表的な活動は次の通りです。

◆総会 支部活動の方針・行事・予算・決算について決定します。

◆役員会 定例役員会は年四回開催し、重要事項の決議がされます。

◆対外活動部会 支部の主要目的である、発注機関との意見交換会において、私たちの要望・提案を行うとともに、発注者の意見も伺い、問題点を整理し、次年度の活動に反映します。下部組織に九つの地域委員会（東京都、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、山梨、長野の各県地域委員会）、と市場調査委員会、国交省関東地方整備局対応専門委員会、自治体対応専門委員会、高速道路会社対応専門委員会が構成しています。

◆コンプライアンス部会 会員のコンプライアンス全般の啓蒙活動の推進

◆災害対策関東支部 一都八県内で自然災害が発生し、協定先より技術支援の要請があった場合、あるいは、他支部で同様な災害が発生し、技術支援が必要な場合は、支部会員の支援を得て、要請に対応します。現在、国土交通省関東地方整備局、東京都、神奈川県、千葉県、茨城県等十三の発注機関と災害時技術支援協定を締結しています。

◆企画部会 支部の各組織を横断的な

立場で総合的に支援する組織です。前述の「関東グロークールビジョン」も本部会で検討され、役員会へ提案しました。下部組織には、企画ビジョン推進委員会、広報委員会があります。

◆総務部会 主に会員の経営管理に関する諸業務（研修会・講習会）を実施しています。

下部組織に、総務委員会と経理委員会を設置しています。

◆技術部会 主に会員の技術に関する諸業務（研修会・講習会・現場見学会）、発注者に対する技術的諸提案事項の策定と意見交換会へのサポート、発注者主催の技術講習会への講師派遣等を実施しています。

下部組織に品質向上推進実行特別委員会、道路・道路構造物・河川・地下構造物・環境・都市計画・情報とマネジメントの各専門委員会があります。

◆事務局 総会・役員会の業務、会員への情報伝達・連絡、各委員会が推進する行事の支援、支部の会計等を担当しています。



平成25年度新入社員研修会で「マナー」のロールプレイ風景（H25.4）



国土交通省関東地方整備局との意見交換会風景（H25.9）

事務局だより

「秋」の季節が、ここ数年短くなったと感じますが、皆様はどう感じられますか。

地球温暖化の影響なのか台風が日本列島に上陸する数も増え、自然災害が多発しています。より一層の社会基盤の整備が求められます。

関東支部の研修会・講習会・現場見学会もこの時期に集中して実施されています。

併せて各自自治体との意見交換会も実施され、各委員会のみならず、事務局も多忙な日々を送っています。

ここ三ヶ月間（九月～十一月）にかけての「研修会・講習会・現場見学会・意見交換会」の実施状況は次の通りです。

【意見交換会】

・国土交通省関東地方整備局・埼玉県・山梨県・栃木県・東京都・長野県

【研修会・講習会・現場見学会】

・契約のあり方講習会・道路講習会・圏央道現場見学会・エール防止講習会

・道路現場見学会・技術者フォーラム・コンプライアンスに関する講習会・橋梁現場見学会・ICT講習会・GIS講習会・道路講習会・環境講習会・ボウリング大会・テニス大会

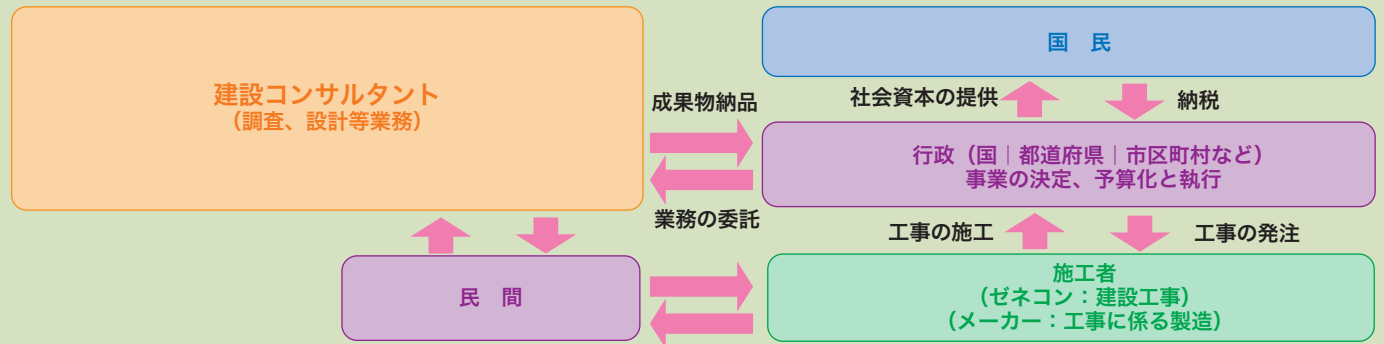
会員が主体の研修会、講習会等ですが、これらの行事には会員外でもご参加頂けるものもあります。

興味のある方は、一度関東支部のホームページ（アドレスは編集後記に掲載）にアクセスの上確認してみてください。

建設コンサルタントとは

建設コンサルタントのビジネスモデル

社会資本は、国や地方公共団体などが主体となって整備され、維持管理されます。建設コンサルタントは、社会資本整備の中で「企画立案」「調査計画」「設計」「維持管理」などを担い、国や地方公共団体のパートナーとして、事業の実現を通じて国民生活の向上に寄与しています。



建設コンサルタントの役割

社会資本整備は、戦後の経済成長を支え、成熟した社会を形成の土台を築いてきました。一方、時代の変化に合わせて、「新しく物を作る」ことに加え、「今ある物を効率よく長く活用する」ことも重要になってきており、建設コンサルタントもこれまで以上に高い専門性と技術力を発揮することが期待されています。また、これからの公共事業は、実際に利用される住民の皆様が使いやすいものを、より安く作り上げることが求められており、建設コンサルタントは、国・地方自治体と住民の間に立ち、中立的な立場で、合意形成を図るコーディネーターの役割も期待されています。

編集後記

- ◇学生をメインターゲットとして、大幅にリニューアルしました。発行時期も早まるなど、大変でしたが、結果としてなかなか良い改定でした。変化を恐れないことの大切さを再認識しました。(浅野)
- ◇建設コンサルタントの魅力を伝えたいという思いで編集した本号。だがしかし、本誌で伝えられるのはその一部。それよりも編集を通して感じたのは、業界で働く我々がその魅力を再認識することも大切だということです。(遠藤)
- ◇今回はメッセージで、長野が生んだ世界的にも著名な建築家である伊東豊雄先生を、お訪ねしてお話を伺うことができました。現在の先生の作品のイメージが少年時代を過ごした長野の自然にあるらしい。今回はその長野について語っていただいたので是非読んでほしい。(稲田)
- ◇長野県のダムで発電された電気が首都圏に送られていることを知ると、ダムの存在がぐっと身近なものに感じられてきます。私たちの生活を支えている様々なインフラと、そこで働いている人たちに感謝です。(荻島)
- ◇伊東先生のインタビューを通して「信州人」気質に触れることができたと思います。業界人として、地域の文化への掘り下げが重要であることを再認識しました。(飯尾)
- ◇千曲川を眺めながらの野沢温泉・戸狩でのスキーが若い頃の思い出。長野県産の竜眼種のワインを戸狩駅前の酒屋で手に入れ、ボトルを民宿の二階まで積もった雪で冷やして飲んだ喉越しの爽やかさは今でも忘れない。(山口)
- ◇3.11の翌日に被災した栄村へ取材に行ってきました。島田村長を訪ね、村役場に入って目に飛び込んできたのは多くの方々からの励ましのメッセージでした。「絆」、「がんばろう心はひとつ」心に沁みる言葉です。(上村)
- ◇今回の「坂東の原風景」では、各方面へ取材をして資料を収集しながら、江戸時代当時の土木技術の凄さを認識しました。やはりいつの時代も土木技術は必要とされているのですね。(千田)
- ◇勤めはじめて20年あまり、毎年必ず訪れる旅館が「長野」にあります。景色や人に魅せられ、なぜか「ほっ」とする場所、それが「長野」だと思います。でも「ワイン」という言葉にいちばん惹きつけられた私です…。(大角)
- ◇何度も訪れている長野ですが、掘れば掘るほど味わい深い物語がにじみ出てくるようです。ワインもダムも公園も…どれをとっても、そこで暮らす人達の想いと長野の自然の豊かさによるもので、この土地だからこそ育まれたものなんだと改めて実感しました。(大城)
- ◇建設コンサルタントでは珍しい建築技術者として、少しでも新風を吹き込めれば…と思い取り組みました。建築家伊東豊雄さんのインタビューを取り次げたことで満足です。加えて、お気に入りの本にサインを頂けたことで大満足です。(片山)

【グローバル関東 制作者】広報委員会

委員長	浅野 泰弘	セントラルコンサルタント株式会社	委員	上村 博見	株式会社建設環境研究所
副委員長	遠藤 徹也	大日本コンサルタント株式会社	委員	千田 純也	日本データーサービス株式会社
委員	稲田 栄作	東京コンサルタンツ株式会社	委員	大角 直	株式会社片平エンジニアリング
委員	荻島 晃	日本上下水道設計株式会社	委員	大城美由紀	株式会社オリエンタルコンサルタンツ
委員	飯尾 昌和	株式会社日本港湾コンサルタント	委員	片山 剛巨	日本工営株式会社
委員	山口 博之	八千代エンジニアリング株式会社			

グローバル関東 Vol.7 January 2014

発行日 平成26年1月1日発行

編集 広報委員会

発行 JCCA 一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-10 松楠ビル4階
Phone…03-5297-5951 Fax…03-5297-5952 <http://www.jcca-kt.jp>

レイアウト制作印刷 株式会社 大 應



JCCA
関東支部